WASON
HQ
1104
J74+

Jan. 1895
no. 406

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百六號

社說

帝國將來の警語（國粹發揮にあり）

女學

本年女學界の標的（勤儉にあり）◉勤勉の鍛錬◉儉約の刺激◉家庭叢書を評す◉女學界の体育論◉冬の夜の話しがたき◉家政おぼえ書（泥棒を惘れむ◉太閤の簾中）◉神代の女性

隨感

明暗糢糊の境◉無名氏を景慕す◉乙女の贊◉劇中の殿樣◉太平の武者修行◉佳人大丈夫◉口耳の學

評論

無神なし性惡なきの辨◉觀時獨嘯（春にして春ならず春ならずして常久の春○學士博士に物問はん○文士の不動明王○問はん哉、問はん哉○才子滿朝○多事は無事にあらず○義戰の內助紡糸にあり○新聞屋）◉我邦の基督教問題◉日清軍記◉大日本膨張論◉年首の歌の聲◉雪績、佛徒に檄す◉西鄕隆盛傳◉新井白石◉太陽◎帝國文學◎少年世界

爛煥

「さびしい」とは何ぞや（布川無識庵）◉さこしへの春（しぐれ女）◉須磨の浦に昔を懷ふ（花影子）◉をみなへし（同）◉なき友を思ひて（同）◉三五の月（好木時文）◉新の雫（白衣）

片々

西園寺文部大臣の女學論◉清國皇太后◉大隈伯北堂◉横井小楠夫人◉公務に於ける婦女の活動◉女子高等師範學校撰科◉田村鴨村◉佐々城豐壽女史◉熊本縣の女子教育◉印度の矯風大家◉孤女學院特別資本

明治二十八年一月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

前號目次

社說
大日本海外教育會

隨感
年の終りに前の節を感ず ◉吾神の降誕 ◉監督ウイリアムを懷ふ ◉佛告大文章の惧悶 ◉思想を讀むの眼識 ◉小哲學 ◉厭世の情もさより有り ◉歷史餅 ◉作人さ大丈夫 ◉長所即短所 ◉打死は所詮失敗に似たり ◉保守黨の男兒 ◉兒童が無念の涙 ◉異邦觀風の覺悟 ◉默契のよろこび

女學
孤女學院の特別資本 ◉女生の高等修學 ◉遠征の將士家を懷ふ ◉戶內隱微の潜勢力 ◉意中の人 ◉家に在るもの家を忘る ◉鐵血宰相の今日このごろ ◉可憐女さ自ら名づけし人 ◉某女があわぬ害さ云ふとに付き ◉年の終りに數を回顧す

評論
事業論 ◉國家及帝室に關する基督教 ◉日本風景論 ◉同じく評(靜淵) ◉近松門左衞門 ◉札幌基督教會歷史

爛煥
なみだの淵(さし子) ◉樹だま集(孤玄) 泡鳴子 ◉石切り(某戲作) ◉博物館を觀るの記(無光) ◉友を失なひて秋の月を觀る(浦のなみ子)

片々
京濱女學校連合市況 ◉圍てる對マクリーン ◉婦人矯風會役員改撰 ◉教育時論が女子教育 ◉島根縣師範校女子部 ◉韓國改正女子教育案 ◉近時の佛界を懷ふ ◉大日本海外教育會

前々號目次

社說
克終論
廿七年の天長節(隱花生)

隨感
昔しの吾友よ ● 前生ありや無しや ● 祈禱のかなり ● 復活の奇跡 ● 神智靈覺 ● 智慧の味ひ ● 父が子の爲に、犬馬さなる時 ● 王陽明が所謂「行」● 躬行實踐は實物教授なり ● 獨嘯鬱錄(破默)

女學
女學界今後の大勢 ● 女學校の裁縫教師 ● 菊女さ云へる方への答 ● 悲しむべし、今の女學生 ● 享主鬱散錄(不[illegible])

評論
教界大勢論 ● 基督教 新教界 ● 風雲大に來らんさす ● 法外の背撲組 ● 宗教は保守也、又進步也 ● 生前の詠草 ● 只た主筒吾を望む ● 西鄉隆盛傳を讀む ● 朝鮮鬱悲錄を讀む ● 日曜[illegible]參論

爛煥
悲哀の美さ女性(布川靜淵) ● 糸ぐるま(空花) 月を傷む(白衣子) ● 博物館を觀るの記(無光) ● 李鴻章(井上次郎) ● 原忠順君を悼むの辭、並に其の略傳

片々
京濱間女學校連合 ● 圍てる對マクリーン ● 前橋廢娼論者氣力 ● 梅花女學校の此花 ● 松川みち子の書信

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院さ異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て教育學上の進歩なみなみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人臨時の義捐金によるを以て教育上の實用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上一層教育上の整備を求めんに其便りを得ずさて院長は太たく心を痛めらるる由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四歲に達せり其前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人さなり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別經濟さして資金供給の方を興へられんとを祈る。之が爲めに定むる所の憲法如左。

一 茲に孤女學院の女學及孤女立身の二事の爲に殊に資金を募集し此資金を名けて孤女學院特別資金さ云ふ。

二 此資金は院兒が從事すべき尤さも安固なる事業(最初は養[illegible])に放資し其收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものさす。

三 此資金及び其收益は孤女學院尋常の生計費に使用するとを許さず。

四 收益の二分五厘を以て孤女の貸銀さし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

嚴本善治 石井ちか
小鹿島筆 加藤さし
田村武治 津田むめ
名出保太郎 小島きよ
古在さよ 青木まさ
平野はま 杉浦逸道

右義捐金取次所 東京瀧川村 孤女學院

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十八年一月二十五日發兌

第貳拾卷第四百六號

社說

帝國將來の警語

國粹發揮に在り

天、大任を我帝國に授け、如今の一大時節、其國躰を提さげて搖曳として活動せしむ。

飜がえつて帝國千古の蓄積する所を念ひ、頭を擧げて現今宇内の大勢に顧りみ、つら／＼大日本前途の天職を覺識し、審念する時に於ては、衷心勃々として禁ずべからず、一生の榮幸悉皆爰に存するの心地す、而して、其任の重大にして、其事の嚴正なるを思ふに於ては、粛然として警しめ、竦然として恐懼するの感、亦禁じがたし。

昔し豐太閤の巨膽を投げかけたる、近世大西郷の雄圖を開展したる、同もに與もに、現在の大勢を煥起し來らんが爲にてありき。東湖の文、松陰の舌、山陽が涙、彦九郎が血、抑そも、何事の爲に流し、何事の爲に揮ひし乎。先人の哲思、万古悠々たり、吾輩後學と雖とも亦た之に默契す。知らず、帝國の氣運は、之が爲めに啓動せられ、之が爲めに發揚して、今日あり。琵琶湖の漣波、大ひに感動することなく、芙蓉の白雪千秋冷々たるか如しと雖ども、皆これ地底烈火の致す所ろ國勢煥乎として今日ある所以のものは、則はち是れ先人流血枯骨の遺績に出るに非ずや。

固より天下の大勢は、極東の帝國と相接はらんが爲めに流動しつゝ來りき。歐洲蠻野の戰ひ稍や熄んで、將に商界に入らんとするや、則はち直ちに東洋の黃金國に着目せり。帝國は、先づ之が爲めに門戸を開き、之と相應の交捗を爲せり。然りと雖ども、世界次世紀の活舞臺たる亞細亞大洲の發揚に宇内の勢力を集中すべき時。哲學、文學、敎育、及び宗敎の諸方面に於て、一大革新を要し、歐米二洲の人、項を伸べて、東方に事あらんとするを感觸せし時、日本帝國は、矍然として、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

門戸より飛び出でたり。必らずや、此の大勢到來せんとは、海波むかし浦賀の瀬戸を叩き初めし比より顯然たりき。所云る東方問題の大時節、遠からずして、日東第一の國に於て開らけんことを待ち受けたり。然れども、斯く迄に迅速ならんとは意はざりき。感謝す、天の吾國を優遇する、殆んど破格の恩あり。

嗚呼、人事の感する所ろは、速かなるが如くにして遲し、天の成す所は、遲きが如くにして速し。天は、吾帝國の柴門を叩き、三顧して之を誘出し、正大の名を與へて、之を鼓舞し、彼の利に拘々たる商事の故に由るにあらず、勢權に戀々たる弱力の故に由るにあらず、眞とに堂々たる義俠仁愛の故に由つて、薦々たる武力を用ひ、速かに荊棘を啓らけよと命じたり。意外迅速の大時節は、如斯して天より到來したり。

夫れ、今の時は、天の時なり。今の命は、天命なり。天の與ふる所ろは、肅しみて受けざる可らず。天の指さす所ろは、斷乎として取らざる可らず。起てよ、帝國の同胞、千古邦家ありしは、則はち此が爲なり。一系万代の帝室を奉じ、世界類なきの畜積を開き、以て宇内無比の國粹を發揮すべし。

昔しは、會津公正之あり、山崎闇齋あり、淺見絅齋あり、或は、烈公あり、三宅尙齋あり、弘道館あり、京都御習學所あり、本居宣長あり、平田篤胤あり。皆是れ、經溥摸倣を非として、盛んに、皇道神典を發揮せんとするにありき。

近年に至りては、曩に、國粹保存論あり、又、東方協會なるものあり。就中、東方協會の設置趣旨には、破題先一に、左の如き、大文字あり。曰く、

寰宇の上、國を建る所以のもの豈偶然ならんや、人民の慶福を圖るに在りと云ふと雖ども亦以て世界の文化を賛するが爲め也、蓋し國の此の世界に於ける必らず天賦の任を自ふものあらざる莫し、唯だ幼稚なる國は自から之を感知せざる猶ほ賤丈夫の徒らに醉生夢死するが如きのみ、士君子の此世に在るや或は一族一邑に或は一洲一國に各其力に應じて盡す所なくんばあらず、之を名けて臣民の公義と云ふ、國家は個人の至高なる團躰にして其任務更に博大なるものなり、個人は社界の進步に力を致す、而して國家は世界の文明に與り天地の化育を贊す之を名けて國家の大道と云ふ、國家の大道は帝王の道なり、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

帝王は必らず宇内に向て其道を行はざる可らず、今や地方に自治を命じ個人に政權を分つ、是れ豈に個人の慶福を圖るに止まらんや、亦以て國家内政の務を簡にして王道を宇内に行はんと欲するのみ、國家の任務は博且つ大なり、王道なるものは域中に跼蹐すべからず。

吾黨は、深く協會の發起者に同情を表す。其の建國の理想の偉大なるは、眞とに世界に誇示するに足ると雖ども、抑そも諸君が此を實地に用うるに當ては、遂に、

此時に當り東洋の先進を以て自任する日本帝國は近隣諸邦の近狀を詳かにして實力を外部に張り以て泰西諸邦と均衡を東洋に保つの計を講ぜざる可らず、

と言はざるを得ず。蓋し、泰西諸邦と均衡を保つ、是れ第一の旨義なり、即はち名けて東方と云ふの外あらざりし耳。嗚呼諸君をして單に此に止まらしめ、亦是れ一種消極維持の策に籠居せしめたるものは、豈に時勢にあらずや。

況んや、彼の國粹保存論の如き。既に「保存」と云ふ。當時該流人士苦戰の情形、直ちに此二文字に於て顯然たり。惜しひ哉、時勢は、亦た、烈士をして防戰の地位に立たしめたり。

勢ほひ、保存、保存の城廓に入らざるを得ざりし也。此に於てか、末流餘弊、當初の烈志に反き、遺憾、固陋守舊の頑迷者をして、名を國粹保存に假らしめ、滔々として救ひ難きの惡勢を捲き起し來りぬ。

近代の時狀既に如斯し。吾輩は、昔時の先人が苦心を察知すと共に、彼等が皆な時勢の爲に籠縛せられ、常に消極の地に立ちて、防守の戰かひを爲したるを遺憾となす。先人、豈に之を知らざらんや、眞とに止むとを得ざるものありし也。蓋し、先人は顧ふらく、國民、其力量を自覺せずして進歩を言ふは、輕薄のみ、吾國家の特色を見ずして異邦に採るは、摸倣なり、輕薄摸倣は、國民の氣力を殺ろし、國家の獨立を亡すと。此に於てか、矯激の語あり、反動の說あり、保守の論あり、非改進の議あり、惜しひ哉、衷情覺られがたく、言外言あるを得ず、遺憾千歲の誤解を遺さしむる所以のものは、豈に時勢にあらずや。

然りと雖ども、矯正を消極的の手段に採るは、清濁併呑して積極的消化の大氣運を起すに若かず。人事尙然り、況んや、如今、天自づからにして、此の大勢を惹起するをや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

近代の預言者、吉田松陰は、かつて熱烈の舌を揮ひ、火を吐きて絶叫したり、

凡そ退守の法は進取の畧なくては万々出來ぬとなり、當今の時に當り砲臺を築き砲門を鑄て海岸防禦異賊手當など罵しる位の怯懦にては迚も神州の保全は出來ぬ也、早く偸安の習を止め四夷出征の策を定めずんばある可らず、是れ客主先後の意也。

嗚呼、攻畧なきものは、守るとすら能はず、然るを況んや、初めより防守に局促するをや。八世大有爲の聖訣は、進取にあり。斷乎として積極的方針に採るにあらずんば、遂に劣敗する耳。

更に況んや、日東の帝國、新日本として維新創業の大抱負を果たすに於てをや。盛んに經綸を施こし、光威を宇内に張らんとす、何んぞ止だ我國と云はん、何んぞ止だ東洋と云はん、當に皇道を四海に張り、國粹を天下に發揮すべき也。此故に大風一たび起つて千枝悉とく一齊に向ふが如く、陽春一たび來つて、万象皆な燃え出づるが如く、帝國今后の全躰は、必らずや、春の如くなるべく、而して、一齊に相ひ伴向するは、千枝万葉の相ひ背かざるが如くなるべし。新帝國に於て、尤とも忌むべきは、消極的方針にあり。大有爲の時機に於て、尤とも避くべきは、因循姑息にあり。彼の心ならず防守の地歩に立たるものは、今や安んじて可なり。國力を自覺して而して後ち敢進せざる可らずとせし當該時節は到來したり。彼の輕々浮薄たゞ追隨して進步の名を冒さんとするものも、憂ひとして斥ぞくべき程のものにあらず。蓋し、將來の警醒は、國粹發揮の四字に存ずべし、眞人烈士もし眞とに之に忠實ならば、區々たる弊害は、容易に之を消化するを得べし、拘々として餘毒に掛慮するも、亦是れ消極の見にあらずや。同胞起つべし、惣ての方面に於て、帝國の國粹を發揮するが爲めに起つべし。

笑ふにも涙こぼるゝ世の中に、
泣きつゝ笑める人もありけり。　景樹

秦時明月漢時關、万里長征人未還。

鬼かみの男子の國は治れり、
惠をきけば聲も臭もなし。　藤樹

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女　學

本年女學界の標的

勤儉に在り

女學界將來の大勢は、既に已に觀測したり、讀者の知了せらるる所ろなり。蓋し、今后の大勢は、極めて望みあり、進步的の女子敎育、遠からずして大ひに興らん歟。夫れ、望みあるも、無きも、苟くも身を獻じて此に從事せる人士の熱意は、左して增減なかるべしとは雖ども、抑そも一陽の來復は、花の開くべき氣節にあらずや。今にして、情熱爛熳たらざるは、天の時を忽諸にするものと云ふべき也。

此の意氣を振作して、慨然として本年の女學に第一着手を下さんとする時、爰に先づ當歲の特色を觀じ、今后の敎育に格別の注意を惹かんと欲す。

夫れ、敎育は、人性の開發なり。開發の基本、自然に存す、之を察らく、當さに普遍なるべく、亦應さに圓滿なるべし。普通敎育に於ては殊に然りとなす也。安くんぞ、歲華につれて、色を更ため、年々花同じきに、ひとり少女の春を人爲の弄びに托すべけんや。

然りと雖ども、時勢は、大なる敎師なり。天すでに時勢を催ふして、國民を敎えんとする時、個々の敎育に於て、安くんぞ之に不感覺なるべけんや。國民先づ偏して至大の欠典を生ず、玆に於てか、天、維新の命運を起し、以て之を更生せしめんとす。此故に、時勢の敎育に從がふは、天の敎育に從ふ也。時勢の必要に應ずるは、當世の欠典を補ふ也。敎育家たるもの、尤とも聰慧に眞乎の時勢を觀識して、以て敎育の運作を操どらざる可らず。

吾人は、玆に於て、本年の女學界に二字の警語を揭げんとす。曰く、勤。曰く、儉。

勤、儉は、新日本創業の爲めに、國民皆な實行せざる可らず。而も、創業の大事、全く成就する日迄は、國民不斷一日も之を忘るべからず。此事、國民の物躰に關し、亦た新日本の一世に關す。然れども、殊に此を要するもの、當年以后の如く切なるはあらず。而して、尤とも切に之に任ずべき、婦女子

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に超ゆる者はあらず。加之、婦女子中、新日本將來の爲めに大ひに責めあるべき、年少女學生の如く、就中、至切、至重の關係あるものはなけん。本年の女學界は、明らかに此の二字を標的とせざる可らず。

國家の事業膨脹せり、男子外に奔走して、千歳一遇の機會、一大飛躍を爲さずんばある可らず。男子の事業、外に擴張せば、婦人家を守つて、尤とも、勤、尤とも、儉。優に家政を處理して、彌よ内顧の憂ひなからしむると切要なり。外征の士は、國内に安頓して勇を奮ひ、又、兵站部の輸送によりて初めて猛進するにあらずや。丈夫をして、外に大ひに戰はしむるものは、内に大ひに守る所ろのものあるが故也。此人、大勤、大儉ならずして、如何で能く支持せんや。

凡そ、ぶせうにして物事を面倒くさく思ひ、締りなくして、[illegible]鹵千万なる婦女子ほど、頼少なきはあらじ。女は、忠實に、甲斐々々しく、敏活にして、勤勉なることそ最上なれ。就中、費えを省き、奢りを制し、程を辨まえ、つゝまやかにして、眞との節儉を心得んと、極めて大切なり。然るに、女子の本性たるや、元來、勤儉のものたり。女子をして怠惰ならしむるとは容易ならず、女子をして大まかならしむるとも難しとす。彼の男子が兎角遊び好にして、十中八九、節約の心得なきと同日の比にあらず。女子本來、勤儉の人なり、勤儉は、即はち女德なり、女子をして勤儉ならしむるは、水を低きに流すが如し。然るに、教えて尚ほ勤儉の德に洽からざるものの多きは、豈に教育の宜しきを得ざるが爲めにあらずや。女學校出身の女生、多くは、此の德を欠く。女學校は、女性を開發すと言ひて、而して、其本來の天稟を啓導するとすら能はずんば、豈に之を教育を施こすものと言ふべけんや。

況んや、將來の國是、大有爲、大飛躍にあり。國家の事業、前途に山の如く高まり、膨脹の遠景、千里の廣野一朝にして開けたるが如し。男子隆んに經綸を施こして、宇内に宏濶の事業を成さんとするに當りては、内助を旨とすべき婦女子に於て、更に一層の勤儉を養なふべきにあらずや。女子教育當路の君子、冀はくは、ことし、此の二標語をして活かしめよ。請ふ、勤、儉の二文字に、鮮々たる生ける血あらしめよ。先づ、之に實行の模範あらしめよ。遂に女界をして一般に勤儉の世界たらしめよ。

勤勉の鍛練

凡そ「つとむる」に種々の工夫あり。常務は務めて守らざる可らず、定勤は定めて勤めざる可らずと雖ども、すべて是れ力行の事、全力を鼓して大ひに力めざる可らず。而して、凡そ此等のつとめの根柢たり、維持たり、刺激たるものは、實に強ひて爲し、押して勉むるの勉强にある也。

故に勤勉の習慣を造り、之を一身に躰するの練鍛を行なふには、第一の工夫、左の秘訣に存す、

一　イヤと感じ、面倒と感じたる其事を勉めて行ふ事。

二　最初は最と小さき手近の所より初め、追々に意志を强くして漸次に大なる故障と戰かふべき事。

當節の事に例を採らば、冬の薄朝あたゝかく、無類の心地して起出でがたきもの也。此の快氣にして起出でがたき一刹那、起きにくしと思ふ當瞬時、蹶然、けつて起つべし（但し女の身にては少々和らかに）。冷水にて、五躰八膚を吹き拭はんに、早やゾク／＼として粟生じ、手かじけて、手拭を搾るにも躊躇せば、此の臆病心出づると同時、即刻、もろはだぬぎ、兩手をザブと冷水中に突入るべし、而して后ち靜かに手拭を搾り、叙ろに全躰を拭ふべし、冬の后に春ある如く、ホコ／＼として、天は即坐に褒美を賜はる也。掃除が面倒と思ふ氣生せば、直ちにパタ／＼と大ひに掃ふべし。お膳は后ほど洗はんとて先づ火鉢の傍に寄らん氣合ひ生ぜば、直ちに立つべし、お膳を提さへて立つべし。但し靜やかに立つべし。」

例せば、ほゞ如斯し。惣じて、イヤと思ふ其事、面倒と思ふ其事を直ちに實行すれば、勤勉の習慣は、知らざる間に熟するもの也、爪の伸る如く、髮の毛の長まる如く、乙女が知らぬ間に年立つが如くなるべし。

儉約の刺激

錢を積むは、塵の積もる如し。寳の在る所ろに、心亦存す。心、美妙の天地に存せず、博愛の情けに存せず、和樂せるホームに存せず、單に錢の上にのみ存すれば、固より歎息の譯なり。

儉約と吝嗇と異なるは、義と利との相異にあり。己れの爲めに節するは、節するにあらず、大ひに慾を張るなり。口に肴を省きて、懷ろに錢を增すとも、何の善きことかある。身に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

綿服を着て、庫に紙幣を飾るは、最上の美服を貪ぼると何の相違かある。左れば、人の爲にせず、公けの爲にせず、即ち、一身を節して、他の爲めに盡すの美心より發せざる節儉は、儉にあらずして、吝也。佳人、士君子の恥べき所也。儉約の福音を實行し、宣傳せると、尊徳先生の如きはあらず。故に、先生は、某が儉約法を非とし、何等の善意思かあり施こすにあらざれば即はち邪なりと言はれたり。儉約の方は、克己にあり。儉約の法は、用意にあり。而して、儉約の希望たり精神たるものは、即はち利他にある也。

故に、儉約の德を、正當に培養するには、左の二件なかる可ず。」

一　儉約すると同時に、何等か、利他の事に施用すべき豫算を立つべし。

二　若干の儉約は、即はち若干の利他に用ゐ得べきとを感覺し、喜こびあるべし。

左れば、儉約の德を鼓舞するには、節したる金錢を他人必要の事に當てゝ計算するより善きとなし。二錢の儉約は、貧兒に二月の鉛筆を與へ、役夫が一回の食量となり、貧しき人全一日の生計費となるとを思はゞ、誰か圓一寸の銅貨を珍重するの心を生ぜざらんや。もし之を青銅二十に換えんか、彼の殊勝なる托鉢高德の僧が、戸々二十の軒の下にたゝずみて朗音誦名するに隨喜して有緣の施こしを爲すとを得べく。寒風砂を捲き、橋邊人稀れなる夜ふけ迄で、ペンペン三昧を彈き、黄ろき枯れたる聲放ち、母子兩々、通行者の影に一々點頭するに對して、少くとも二十回以上の空しき失望を慰さむるとを得べからずや。

若し如斯く觀じ來れば、慈悲の心の加はるにつれて、儉約の心長じ、儉約の德長ずるにつれて、善を爲すの實彌擧がるべし。之を儉約の道とは言ふ也。儉して懐ろを温ため、錢を溜めて人生の平和を得んとするは、返々も、淺ましく、又、情けなき心掛にこそ。

○家庭叢書

第五、第六の兩卷は、小兒教育と家庭衛生との題目なれば、何人か專門家の說を乞はれしと見え、太はだ有益なり、但只だ思付きの怜悧なるを以て優れりとする耳にあらず。されど餘がつて、

酒は精神を鼓舞し血行を旺盛ならしむるといへども飲まざるを好とす。など、ちと平案の說に還ふものもなきにあらず。

第七卷「家政整理」に至ては、亦これ才子の編輯、周密と云はんより思付を以て見るべしとす。「主人は何如に多忙なりとも、切めて自分の居間丈は自から掃除すべし」、など有がたき注意と云ふべし。

女學界の體育論

時の通弊は、具眼者をして同じく觀察せしめ、識者をして一樣の矯正を說かしむ。去年、福澤先生が、女生の筒袖を勸告するに至りしなど、法外に躰育を奬勵し、井上文部大臣が、何れも、時勢の必要なり。前年、有名なる某先生は、千葉縣の敎育會に於て、左の如き演說を爲したるよし傳ふ、

女子には、學校に居る間に躰操をさせないが宜しい、何故と云ふに、操躰して居る間は善いか知らぬけれども、日本の風として人に嫁して住つた后には中々運動するなどゝ云ふとは出來ぬ、又外に出でて散步するとも出來ぬから、學校に居る間から運動をしないとに馴らさなければならぬ。

又、關西の女學校に於ては、躰操は、女生の顏色を黑くすと言ひて之を憚かり、もし之を勵行すれば、父兄は其子女をして退校せしむるならんと掛念するもありし。

然るに、去年來、躰育論大に起り、ことに軍國の氣燄、戰爭によつて大煥發せしこの方、如斯き愚論は自づから消滅せるものか、今も、女學界にも亦た大ひに躰育論の行はれ來らんとする兆候[illegible]

華族女學校長たる細川潤次郎氏は、同校の運動會に於て演述して曰く、

我國に在ては一般の躰操を用ゐると日猶淺く經驗も亦少し殊に女子の性質に適せず併せて女子天然の美觀を損せんとを恐るるものの如し、果して然る時は決して採用す可き者に非ざるが如しと雖ども是恐らくは皮相の見にして眞正に美容躰操の趣味を解せざる者なるべし、本校に在ては主として美容躰操の方法を酙酌し力めて異議者の說を納れて其頽廢する所の弊害を避け其遊戯に於けるも亦力めて規律ある者を擇み危險の虞なく惡風に染まざらんとを期せり、本校は從前より躰操の設けありと雖ども專ら獨逸風の躰操の一部分及び我國固有の舞に類似する者を用ゐて其効果を試みたりしが身躰を運動して閑雅優美の風を失はざるとは賞用す可き所なれども稍や柔軟に過ぎて筋肉を發達するとを未至らざる所ある可く擧動の方法繁雜に涉・習熟し難きの憾なきに非ず、故に本學年度よりは獨逸風の躰操を擴張して諸種の方法を用ゐ且つ從來一週に一度なる躰育課業の度數を三度に增加して從來の不足を補ふとを力めたり、又今日の如き運動會に於て各級の生徒を合併し躰操游戯の大演習の如きとを爲すは恐らくは今回を以て始とす可きものならん。

女子高等師範學校長たる篠田利英氏は、女子の高等敎育は、其の健康を害するとの俗論を打破し、各國の例證、大家の證論を巨多引用せるのち、演述して曰く、

明治二十三年以來の帝國統計年鑑を平均するに、二十年以上三十年以下の女子は千人に付一年に七十二人八分一厘强の死率なり、之を通常の婦人が死亡の割合と見做し、女子高等師範學校卒業生三百五十七人を比較せんに、此卒業生の平均年齡は二十七年十ヶ月なり、即ち二十年乃至三十年の婦人に相當す。然るに、此卒業生三百五十七人のうち死者二十六人あり、千人に付き七十二人八分二厘强の割合なるが故に、通常婦人の死亡に比ぶれば、千人に付只だ一厘强、死亡多し。

更に統計年鑑四年間の平均に於て、十六歳以上二十歳の女子が死亡を見れば、千人に付二十九人七分九厘の死率なり。而して女子高等師範學校附屬高等女學校の卒業生百四十三人のうち十六歳以上二十歳迄のもの五十九人にして此の中死者二人なれば、千人に付三十三人八分九厘の死率となる、即はち千人に付き四人一分丈け所云る通常の婦人の死亡よりも多し、而してその一人は難産にて死し、他の一人は肺病にて三月卒業し八月死せり。更に此卒業生の中、八十四人の年齢の平均は二十歳三十歳との中間にあり、然るに此八十四人の中二人死したるが故に千人に付二十三人八分强の死率となる、之を所云る通常婦人の千人に付七十二人八分一厘强に比すれば實に少なきと四十七人餘なりと雖も、此の比較は正當のものにはあらざるべし、何となれば右八十四人の年齢は二十四五歳の平均なるに通常婦人の方は二十歳より三十歳迄のものを含めるが故なり。左れど此の八十四人の死亡の割合を通常婦人の十六歳以上二十歳以下のものの死亡に比するも尙ほ五人九分强、即はち六人ほど少なければ、無論同年齡の通常婦人よりも死亡少なきこと明白なり。

蓋し尫弱を以て美なりとし、卑屈を以て貞なりとせる俗論の好尙は、速やかに之を打破せざる可らず。

冬の夜の話しかたき

會話は、言の葉の取り遣りにて、人と相ひ樂しむ無形の珍味なり。一家團欒の睦みを冀ふものは、玆に考ふる所ありて、眞實に其方を心得べき也。况んや、妻にして、良人の心を慰さめ、老たる義親にまめやかに仕へんとするものに在つては、機に臨みて用捨勘辨し、巧みに其の樂しみを養なふの覺悟な

くんばある可らず。雨窓閑話に、家來が主人に仕ふるの心得を示し、三つの實例を擧ぐ。其こゝろ蓋し長者をよろこばすの秘訣を說ける也。曰く、

曾呂利、太閤の出頭たりし時、太閤の近習の輩、曾呂利へ尋ねて申すは、御邊は殊に君の思召に叶ひ類なし、いかゞして斯の如くに御意には入るぞや、我等ども御側に勤めて居れど、やゝもすれば御怒を蒙るとあり、此事貴方の傳授にあづからんといひければ、曾呂利曰く、毎日食をくひ給ふかと答へて、毎日食ふと云ふ、飯の風味はどのやうなる物にかと問ふ、又答へて云く、斯くと定りたる味はなけれども、只だうまき物なりと。曾呂利また菓子はうまき物にかと、答へて曰くうまくして甘し。曾呂利、然らば飯は定まりたる風味もなければ明日より飯をやめてうまき甘き所の菓子計りくひて居玉ふべし。彼者聞きてそれは一向にならぬ事なりといふ、曾呂利大ひに笑ひてさればの事也、貴邊は菓子を以て君に進め、我は飯を以て君にすゝむる故に、いつ迄も飽かると云ふ事なく、甘きものは時宜によりてあしく、飯はいつにてもよき物なり、しかし何もうまき風味はなし、貴方は心に甘き所を以て君の

用ひ玉はんとを期する故、大に了簡違へり、我は飯のさまでの風味もなき物なれども、退屈し玉と云ふ氣遣ひなる事なきを旨とす。春の寒きと秋の暑きと年寄の健なると君の寵愛とは必ず久からぬとのとなれば、其心を以て媚びず諂はずして實直に奉公し玉ふべし、外に傳授もへちまもいらずと申しければ、彼侍も納得し、大に歡び歸けるを、門口より呼び返し、かまへて飯の事を忘れ玉ふな、菓子をな喰はせて虫を出だし玉ひそと申しければ、彼男腹をかゝへて歸りけるとぞ。

評に曰く、其理平淡なり、而して、其辨花の如し。其説、問ふ人の急所をさして、其心得、言外にあり。所詮、其の心得を察すべし。

又、三代目將軍家、ある時櫓へ御上り遊ばされ、御小姓衆に仰せられけるは、誰ぞ此櫓の上より飛び候はゞ褒美遣はすべしと仰せ出されけるに、我飛ばんと云ふものなかりければ、御氣色損じて阿部豐後守に承はり申すべしとの上意なり。此故に、豐州侯の方へ行きて尋ねられけるに、豐州侯御申し有りしは、それは格別、各方の不調法なり、左様なる働のなきとてある可き、かさねて御尋などあらん時、傘をさし候はゞ心安く飛び申すべくと答へ申されよと也。扨て其後又々御櫓に上り給ひて、先日も申しゝ如く、此上より飛ぶものあらば、何になりとも望むものを與へんとの上意ありて、御戯れ遊ばされけるを、御側衆、傘などさし候はゞ飛び申すべくとありければ、將軍家御機嫌殊にうるはしくありしとぞ。かの御側衆後日に豐州侯の方へ禮ながら參られて、上意に叶ひし由申されけるに、豐州侯宣ふは、夫は一段の事也、しかし以來とても、御身近に仕はれては、箇様の事、專ぱら心得ある可き事なり、上様御戯に上意遊ばされ候事は、何れにても戯れて御返答申し上げられよと也。

評に曰く、末言一句、仕ふる人の心肝をうつす、老巧者練の覺悟といふべし。

又、備前の池田武藏守利隆侯の家臣伴ノ大膳といふものあり、主人の寵愛を得て出頭すると斜ならず、傍輩の者之を嫉みて、大膳に出頭すべき傳授を致し呉れよと望む。大膳眼を瞋らして、其心故に寵愛をば得ざる也といひて散々に叱りしが、稍ありて面を和らげ申すは、勘氣を得る事を敎へよと云ふともなく、主人の氣に入らんと思ふ心が殊勝なれば、一口申し

て聞かすべし、近侍の輩上手に嘘をつくゆゑに叶はず、我は下手に嘘をつくが故に、御意に叶へり。大名は正直なるものなれば、随分不調法に見えすくやうに嘘をつくべし、上手のうそは、必らず佞曲なるものなりといひける。

評に曰く、其の教ゆる躰裁を見るべし、一頓、一挫、一僞、一眞。この故にこそ、平素の心掛を見るべけれ。

家政おぼえ書（一）

◎菅茶山の「筆のすさび」に曰く、凡そぬす人の入るは、表の戸、裡門のあきたるを見て、心を生ずる事多し、人皆な寐んとするとき、必らず門戸は閉ざせども、或は若き男女のあそびありきなどに出で頓て歸るべしと思へど、とくにも歸らず、或は戸ざしすれども、眠ながらにして、固くさしえずなどする事あり、戸ざしは必らず主人おのれ自身すべきと肝要なりと。戸のあきたるによりて、盗人を誘惑するは、不慈なり、此の一點、警しむべきと也。亦た今の世にて言はば、戸さしは必らず主婦おのれ自身にして、下男下女などに任すべからず。

◎太閤秀吉の簾中は幼なきより父の知り人伊藤右近の世話になり、木下藤吉足軽の時の婚姻は、大抵此の人の信切にて支度を調のえたり。他日太閤關白の奥方となり、右近を尋ね出して種々の禮物下し賜はりし折、右近夫婦が側によりて、御ふくめ（木綿わた入）殊の外によごれたり昔の禮に我等洗濯して參らすべし脱ぎて行れよとて別の着類を與へ、十日ほど有りて過日の洗濯出來あがりしとて城へ召され簾中直ちに下し玉へりとぞ。天下關白の奥方にて、十日間に、自から洗ひ手づから縫ふ、恩義に報ゆるの情けも、昔しを忘れぬ覺悟も、ともに感歎の外あらず。今の貴婦人は、善き事を忘れて、可らぬ事を久しく記臆せらる。

○神代の女性

凡そ二年、文筆の間だに殆んど聞ことなかりし外山正一氏は、本月の哲學雜誌に於て「神代の女性」一篇を掲げしめ、陽春來復の景しきを、先以て此花一輪に漏らさるる如し。曰く、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

本邦女子の心は古來頗ぶる氣高き者にして決して卑屈なる者にあらず本邦の女子には往々男子も及ばざる如き勳功を立てたる者さへ尠なからざる事は史上に歴然たる事實なるが是れ蓋し神代に於ける女神等より傳來せられたる美質に由れる者ならむ。

と、則はち、神代の女性は、權力なか〳〵盛んにして、男神を壓倒するほどの勢力ありしとて「須世理比賣が甚く嫉妬し給ひしが故に大穴牟遲神は棄てゝ去らむと爲し給ひしかども遂に其御決意を果す事を得給はずして嫉妬し給ふ妻の御許に依然留まり居玉ふの外は策は御座さゞりし也」の例を擧げ、又、神代に於ては、自由結婚行はれしとて、「八千矛神は先づ預じめ比賣の御親の許諾を得玉ひ然る后に御本人たる比賣の御意向を問はせらるゝ抔云ふ如き廻り遠き途を採る事は爲し給はずして直接に打ち付けて短兵急に御本人に御心を通じて口説き給ひし也」の説も見え、なか〳〵面白き辨解なり。

本邦女子の性質地位の如く優等なるものは他の東洋諸國には決して見ざる所なるが是全く神代よりの賜物なり。眞意、文外にあり、筆者が、微笑巧言の躰も見えて、結局と言はれたるもの、之も亦た別意ありげに、力なく感ぜらるるぞ遺憾なれ。

隨感

○明暗模糊の境

閑寂として人事の遷りゆきをながめ、榮枯生滅に物の意味を觀得して、一恨、一惜、一喜、一憂、而も、超然として拘つらふとなく、確然として疑がふ所ろなき人の心には、光暗相交はり、去今相かはるの一刹那こそ、心にかゝりて而して美の想の切りに動めく時なるべけれ。霞のやうやくに立てこめて模糊として城樓を遺すの時、樹葉夕鐘に震るひて遠寺のかげ大方た沒せんとするの時、漁火明又滅、滅又明、杜鵑、聲斷又續、則はち意かゝり念ひ動きて、縷々焉として望みを伸縮するの時ぞ、言に盡しがたく、筆に寫しがたき趣味の祕ぎる折なれ。古き童謠に云く、おもしろの春雨や、花の散らぬほどに降れかしと。春雨蕭々、花散らんとして未だ散らず、この散らず散らんとするの機會こそ床しけれ。

○無名氏を景慕す

深山に入りて、溪水の彌よ白く、野花のいよ〳〵潔よきが如く、田間を訪ふて、農家のます〳〵質朴に、野人のます〳〵篤實なるが如く、世の人は、奥まりたる所ろ、隔たりたる所、隱れたる所ろに住へる者ほど、いよ〳〵ます〳〵其の美しさを増すものかや。一度び眼を放つて當路在上の公人なるものを見れば、慷慨大息禁すべからざるもの多くあるにも係はらず、無想にして忠實なる、閑靜にして義務を重んずる他の幾多の無名氏を觀れば、生平痛言し熱告する所ろの理想は現に形をとりて爰に人として存在する也。嗚呼、何んぞ其のうるはしきや。牧師に感服すると少なけれども、其が信徒にして、聖日には默して會堂の偶に坐り、何の知る所ろもなげなる、沈厚寡默の無名氏には、師事して學ぶべきと多くあり。聞えたる敎育者中、傾倒して慕ふべき人は多くあらねど、所云る學生と稱するものにて、自己が美質を測知する批評眼すらあるとなく、只だ循々として學びつゝある無名氏には、既に先生の躰を具ふるもの多くあり。彼の代議士と、茅屋の民と。大臣大將と、一兵一卒と。驕然たる貴人と、其の謙だりたる妻と。もし一々之を對照比較すれば、嗚呼夫れ何たる顚倒ぞや。狼狐が、小やかにして愛らしき花に矢を落とし、姦人が咀ひの舌を、泉涓玲瓏たる清き流にひたし、醜に塗れし無作法なる烏が、淸楚馥郁たる梅が枝の蕾を毀ち、毒婦が汚れたる不貞の裳を、神壇の御靈の水にて洗はんとするなどを見る不快にして耐ゆると能はざるの感慨止む時なし。嗚呼、何如なれば、善人、上に在つて、凡人、下に立たざる乎、淸者、何故に風翼に乘じて、不潔を拂はざる乎。人ありて若し、右手に在權者、紳士、公人、牧師、敎育者などを指ざし、左手に、無名氏、某、某、某等を指ざし、其一方を除去せざる可らざるが故に、何れをや除かんと問ふとあらば、余は直ちに右手に向ひ、此の實なくして僞多き、貪利にして悧巧ぶれる、只だ上に在るとのみを好む輩儕は惣べて除却さるるとも毫も惜しまず、帝國は之により決して損を受るとなしと斷言せん。但だ一日も無かるまじきは、中流にあつて無名なる、無名にして有德なる、有德にして毫も誇るなく亦た自から知るとすらなき、眞乎の聖者君子人にてある也。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

人或は曰く、次官、長官となれば、人望なし、公人は、環視せらるゝが故に過失の發見さるゝこと多き耳と。余も亦た雪は地上に降だつて白く、仰ぐとき黒きことを知れり。然れども、今の在上者は、降るとき、彌よ黒からんもの也。

○乙女の贊

十二三歳の少女、既に女性の境に入りて、未だ飾ると云ふことの左程ならざる年頃の乙女こそ、最と愛らしきものなれ。之を花の蕾に喩えんか、微しく紅氣を呈して倘ほ一枚を落さゝるの所ろ、遙かに眺めて枝端風流あり、さつぱりとして而も言ひがたきの趣味ある所ろ、太はだ愛らし。之を春の初に譬えんか、上わ氣の色、微塵もなけれど、左りとて、冷やかなるにあらず、倘ほ多少の冬景色を遺して、折節遠慮なくぶせうらしきを見する所、天眞ことに愛すべし。花ならば、開けし後の美くしからん、春ならば、熟せし比ろの長閑からんと、望みの思ひ、預かじめ反映して、既に色あり。もとより恥かしみと云ふもの、無ければ、疑はず恐れずして、信じて物かたらふ。透きとほるが如き無邪氣、本來のやさしを示し、可笑しきことに打案ずるの爲躰、天の使が世事の相談する如し。されど、一と度び難めるものを見れば、自然の情け自づと動き、介抱扶助すること、あらくれ男子の比ひにはあらず。殊勝にも、母なる人の助けするを見れば、更に愛らし。父なる人の肩もむ所など見れば、倘更に床し。嗚呼、乙女。純潔、汝の如く、清白、汝の如く、疑がはざる、汝の如きの人、抑そも、如何なる護りの下に、世の風波に當らんとする乎。他日路上の婦、眉せまり、頬落ち、戚然として、物思はしげに、疑懼として、あたりを氣遣ふ如く、只た悄々乎として、歩みゆくの狀を見、もしくは、輕ろく裝ほひ、艶に飾り、僞り笑ひ、そら言を巧みにし、男子を物のかづとせずして、心地あしく近より、眼こを細くして、長舌を轉ずる輕薄の女を見、もし彼の優々如たる乙女に比ぶるときは、感慨如何に。嗚呼、乙女、願はくは、其の純潔を固く保ち、其の蕾を久しく緊め、其の心を容易に開かず、たゞ終生無二、長久安んじて渾身を托すべきの人あるの日迄で、必らずや、其うるはしさを失なふこと莫れ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○劇中の殿様

一身を主宰し、百躰を活動せしむるの心は、人に於て其の王なりと云ふべし。然れども、此の王たる心ほど、見えがたく視りがたく捉らえがたきものはあるまじ。論者曰く、特に心なるものあるにあらずと。心や、敢て之を無禮なりとせず、未だ曾て出現して明々地に論破するとあらず、而も遂に衆人をして自づからに畏服せしむるにあらずや。万人喧囂する時は、渠は默す。俗事騒擾なる時は、渠は隠る。若し單個肅然として正座すれば、渠は來臨す、威望堂々たり。若し罪過に陷いつて秘せんとすれば、渠は必らず叱す、嚴然として犯す可らず。居らざるが如くして、常に在り。知らざるが如くして、何事も知れり。たとひ論じて不可なるとを揚言せざるも、其の不可とする所の事は、違々として遂に行はれず、其力、尤とも雄大にして、其姿ます〳〵見えず。人に於て、其王の如此くなるとを見る。豈たゞ人に於てのみならんや。物の精は、皆な見ると能はず、見るべき所のものは、たゞ形骸枝葉なるのみ。誰か、闌の香りを握り、風流の色を嘗め、聖戀のかんばせを見るものあらんや。終に想及して、天地の主宰に至るに、天地の主宰また見るべからず。凡そ、眞乎の主宰は、目睹しがたきもの也。尋常凡俗の眼中何をもてか、能く之を寫さんや。故に潜勢の力は覺り難く、中心の主動は顯はるゝものにあらず。傳記、何ものぞ。歴史、何ものぞ。事業、何ものぞ。勳章、何ものぞ。凡そ人衆が寰視して騒々として仰望する所ろのものは、只だ是れ劇中の殿様たる耳。

○太平の武者修行

高山彦九郎、領主の問に答えて曰く、亂世には武者修行と云ふ事の候由承り候、今ま太平の御代に候へば諸國に名ある人を捜し求めて善き事を聞かんずるにて候、其よき事と申すも忠孝の事より外にても候はずと。彼、備前閑谷の學校に宿して其學制規約などを尋ねしかば、敎授の人本一冊を出して示し、其翌早くかの寢たる所ろに行きて見れば、彦九郎は尙ほ燈に對して其本を寫し、既に半頁ばかり殘りたるをやがて寫し終りぬ、凡そ五十葉許りの寫本なりしよしと傳ふ。道を求

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

めて、堅忍なると斯の如し。學に力めて、精勤なると如斯し。勝伯が一年大字書を寫すと二部に及びしとなど、近頃聞き合せて、今の學者に思ひ及ぼし、又、自から警しむると太はだ切なりと云ふ。

○佳人大丈夫

詩仙テニソンが英國の國歌をうたふや、英國男子の丈高く膂太きを誇ると共に、亦其が女性の爲めに誇るとを忘れず、

There is no land like England.
　Where'er the light of day be ;
There are no wives like English Wives,
　So fair and chaste as they be.
There is no land like England,
　Where'er the light of day be ;
There are no Maids like English maids,
　So beautiful as they be.

万葉の歌人、また歌ふらく、
　大丈夫はみ獵にたゝし女子は、
　　赤もすそ曳く磯の濱邊に、

同に兩性の粹を畜きつくす、和應こゝにあり、相助こゝに在り、綿纏こゝに在り。併せて之を歌ふ、人世の美、初めて完たし、聖愛の理想、初めて顯はれたり。

○口耳の學

願はくは、口耳の學とならじ、敎えらるゝは實物に若くものなく、知るは實踐にあらずんば徹底せず、彷彿として影を捕ふるが如かりしもの、一と度び、之を握り之を抱きて而して後ち其實形を親識す、こゝに於てか、經驗の徳を覺とり、苦練の味を甘ましとす。實行を廣告するは、ずでに實行にあらず、默契深識して、審びらかに、其の理はりを念はん哉。筍子曰く、小人の學や、耳に入て口に出づ、口耳の間則はち四寸のみ、曷ぞ以て七尺の軀を美にせんやと。我邦人に在ては、其間、四寸だになし。

〰〰〰〰〰〰

鐘聲涙を打て腸氷る夜はなみだ
里の子よ梅折のこせ牛の鞭

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

無神なし性惡なきの辨

天地神明に對して最とも善き靈生を寄する、此の生を宗教の生と云ひ、同胞人類に對して最とも善き精心を寄する、此の心を道德の心と云ふ。故に、端莊嚴肅の感念、此中にあり、偉麗宏大の志想、此中にあり、博愛悲慈の精神、此中にあり、克己献身の覺悟、此中にあり。即はち、人類が最高、最眞、最美の意識皆な此中にあるを以ての故に、宗教と道德との觀念は、太はだ緊要、最とも麗はしきものと云ふ也。

但だ夫れ、天地神明に對して、其威靈を識悟する所以の能力に至ては、人に於て等級あり、智識美感によりて優劣なきを得ず。此に於てか、其の、神なりとし、上帝なりとし、天父なりとし、大自在力なりとし、大不可思議力なりとする所以の感覺に至ては、各人各様あるとを免れず。其の彌よ優進して、其の彌よ美妙の地に到らんとは、人生の一要件なりと雖ども、實際宗教の鍛錬に於て主として切要とする所のものは、各人意識する所の宗教上の中樞に向つて、至誠、至信を傾盡するにあり。即はち、心を盡し、意を盡し、精神を盡し、此の主なる汝が神を信愛するにありとす。

道德上の事亦然り。誰か、絶對の善を、人世の事に寓して永久普通に指示するとを得るものあらんや。昨日の是非、今日と異なり、他の善とする所ろ、吾が善しとする所ろと同じよ能はじ。何んぞ止だ他人と云ひ、他日と云はん。吾自己が善とし惡とする所ろのもの亦長久に固定するとを得ざる也。故に、道德上の善惡は、事にあらずして、意思にあり、行の形跡にあらずして、其の精神にあり。事行の形式は、知る所の濃薄、觀る所ろの廣狹によりて隨つて變ずべし、智者の斷と、凡俗の見解と自づから異ならざるを得ず。然れども、善なりとして意識し、此の意識によつて斷行する所ろの事の、道德上に於て惣べて善なるに至ては、各人皆相同し。

左れば、神學を講ずるもの、倫理を論ずるもの、智識の進み美の趣味の優れなんとを旨とする者に於ては知らず、專ばら實際に信仰の堅固ならんと、善行の篤實ならんとを旨とすべ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

き、所云る宗教の人及び道德の人に於ては、隨に以て、各自が其の神とし其の善とする所の主觀に向つて赤誠至眞を傾盡することを要すべき也。もとより此外に要なしとは言はず、當に最とも要とすべきもの玆に存すと言ふ。故に此主要を欠きて他の偏理所に趨るを以て甚だ不可なりとはする也。人一日も、其神とする所ろ、其善とする所のものなくんばある可らず。之なきは、即ち人間最高最美の觀念なきもの也。而して、人間素と初めより之あるを常とす、但だ應に平常之に仕へ之に力め、此等の主觀を以て其行事を主裁せしむ可きに至つて、悲しむべし、拘々の曲學、狹々の神學あつて、强ひて、人の主觀を打破し、天眞元と自から不知不識の間に、神に向ひ善に向ふ所ろの人性をして、故さらに無神、沒善に向ふと思念せしむるとある也。神より離れしむるものは、神學也。善を疑わしむるものは、道德論也。もし此等の理窟なかつせば、人間本來豈に神と道とを無みするものあらんや。莊子の激する所ろ、ボルテアの罵しる所ろ玆にあり。超然たる老子遂に言なきを得ず、必竟、此の故耳。

故に、吾黨は信ぜず、世上人類に、神を信ぜざるはあらず、善に向はざるはあらず、所云る無神を論ずるものは、當世の神學に反くの謂ひ也、所云る善を無みするものは、當世の曲學を輕ろんずるの謂ひ也と。人あり若し之と學理を論じ、討論究極して其眞を發揮せんとすと云はゞ吾黨は關せず。若し夫れ宗教の信仰を高ふし、道德の實行を篤からしめんとを希圖するものに於て、單に一般論理の辯士と伍して、只管ら此般討論の事にのみ汲々せんとするものを見ては、密かに其救濟心の緩漫として慈悲の太はだ信切ならざるとを奇しまざるを得ず。

打破は警戒の一方にして、敎化の上に効あるとあり。然れども之れ必らずしも開發敎導の最上手段にはあらず。彼の宗教及び道德を以て人に臨むものは、打破警醒の一方を採ると當に吝なるべし。温乎として之に臨み、春然として之に接し、須からく先づ其在る所ろのものを啓導して循々として之が開發に盡すべき也。吾、汝等の知らざる神とする所ろのものを告げんと云ひ、吾、預言者の言を廢せずと云ひ、汝等はもと神の靈殿なりと云ふもの、抑そも此類開導手段の消息にはあらずや。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

之と均しく、人事万般の最后の判断をして、其の道德上の主觀に一致せしめ、安んじて之れ最上の善なりと確認せしむると極めて緊要なるを觀る。例せば、論士、近頃ろ外交の事を說きて、道德は個人の間に於て行はるべし、國際の間に在ては、利害あり權略あるのみと言ひき。吾黨屢ば此般の辯論を聞きて痛たむと切り也。夫れ、此般の辨、國際間に於ける道德の理想を高ふせしむるの利あると共に、人をして國家の間に些との道德の行はれざるとを感ぜしめ、悄々乎道の薄弱なるとに失望せしめ、彼の當路者をして、權略利害そのものを以て國際事務に處するの主觀として意識せしむると共に、世上滔々たる求善の人をして、薄信自失せしむるの害あるや大なり。夫れ國際方今の交度に於ては、利害の多少を以て量るを最上の道とす、而して國際の權衡を維持し、其政略を實行するに於ては、自から權略なき能はず、之れ外交家の德義なりとす。此故に、外交に於て、利害を標準とし、權略を手段とするとあるは、方今の國際に於て、至當正大の處置なりとす、即はち是れ其の道德にあらずや。此故に、當路の人は、之を觀て、利害の爲にし、權略の爲にすと思ふと勿れ、當に

則はち國際間最上道德の爲にすと確信すべき也。夫れ人にありては、利害權略の觀念たる、太はだ醜劣なるものとす。自から此等の觀念を主として處置すと思念せば、衷情不安あり、其知確信なし、則はち區々として常に恥づる所ろあるが如くんば、大丈夫の墜落之より初まる、豈に堂々として一國万乘を代表顯照するの氣魄あるとを得んや。國際方今の義、此を以て最上とすと信ぜば、則はち之れ其の道德にあらずや。理想は、當に高かるべし、實行は時の度合に準ず。斷じて之れ道なりとするの確信より發せずば、何如にして、白日天下に對するの面目あらんや。願ふに、今の外交無德義のことを慨するものは、偶たま以て德義の勢力を大損するものにあらずや。

曰く、神を信ずるものは罪を犯さず。曰く、道を行ふものは恥なしと。眞乎に此の實行あらしめ、現在に此の平安に居らしむるの宗敎及び道德にあらずんば、人は反つて弱行薄信の輩とならん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を益して、而して尚ほ万世を益するにあり。既に見る所ろの兄弟に効なくして、何如で未だ見ざるものに益あらんや。

文士の不動明王

杜鵑、血に鳴きて、一句あり。木の葉、風に散りて、歌なきを得ず。大厦、半ば朽ちて、鵲鴣の飛ぶは、感慨の吟を催ふすべし。人と、國家とに關しては、動かざるを得るや。

ながめじと思ひすてても兎にかくに、
涙せきあへぬあきの夕ぐれ。

問はん哉、問はん哉

蚯蚓の丈短かくとも、斷たば二つに生きん、鶴の足長くとも、切らば必らず倒れなん。偉男子の膽は、動かせども、動かず、小匹夫の心は、關せざれども、尚はまごつくとかや。國を割かれて感ぜざるは、偉なるか、無神經か。勝つて驚ろきの止まざるは、進化せるか、小さきか。金箔は黄金の色を呈すれども、薄く、土は厚けれども、味はひなし。似て非なるは、非なり、非にして似たるは、更らに非なり。問はん哉、問は

観時獨嘯（八則）

漆にして春ならず。春にして常久の春なり。

砲火、舌はけども、炎煙は温かき息氣にはあらず、壯士胸中の熱血、朔風の寒きをして冷えしむ。嗚呼、吁、御座、煖爐を磨て、新年をして後日に來らしめ玉はんとす。語を寄す、千門万戶の松、暫らく土着して成大せよ。日章の旗、旭日を多くし、渤海、遼東、春はじめて春たり。万馬、嘶なく所ろ、夢破れ、捷報來る時、夜に晝あり。國民すべて同民、國家まことに一家。明治第二十八の一月、ことしの一月は、眞に第一月たり。

學士博士に物問はん

富士山は高しと雖ども、根柢は三國の土を踏める、日本海は廣しと雖ども、豈に濱砂を洗はざらんや。當今の學者、高し廣しと稱して、足下周圍の世事と相接せず、接して重きを爲し、淸きを與へざれば、何の益あらんや。學者の用は、現在

ん哉、たゞ其人の心に問はん哉。

才子滿朝

東坡は、左の一詩を遺せり、

人皆養子望聰明　我被聰明誤一生
惟願孫子愚且魯　無實無難列公卿。

彼は支那人なれば也。日本の勝海舟は歌ふらく、

蟄龍登山澤　衣冠空飾美
弊袍赤脚奴　或有卓識士。

才子、朝にある善きか惡きか。卓士、野に遺る善きか惡きか。出來べくんば、東坡、海舟の、相ひ談ずるを聞たし。

多事は無事にあらず

誰か、權兵衛を笑ふ、烏の爭ふときも、尙は種子を蒔かずや。感ずべし、賽河の兒等、鬼來れども、欒然として石を積む。相撲とりを良人に持つもの、家に安閑として居られうや。多事は、無事にあらず。軍さ人に負はせて、算盤を紛失するものやある。

義戰の內助紡糸にあり

ワシントン、出でゝ義のいくさに從事すれば、母は村莊に糸を紡ぐとを勵む。米人、此の心を失なへばこそ、選擧競爭が事業に損失多きを歎つもの年々增加すれ。餘裕なければ、撰擧すら旣に然り、更に况んや戰爭をや。

新聞紙

生なきは死する也。一代の風趣前年と異なり、人々、生命の說を歡こぶ。此氣なき文章は、死せるが如し。此文章なき新聞紙は、活氣なし。續々として亡びゆく、

我邦の基督教問題

橫井時雄君が緖言に云く、論旨に至りては四五年間に於て吾が熱慮の歸着する所ろぞ。其の任ずる所ろ察すべし。

二百二十四頁の前半は、天文十八年、フランシスコ、ザビエが初めて渡米したる日本傳道の紀元より、明治二十二年、新

教傳道全盛の絕頂、機將に一轉せんとする時節に至る迄の略歷史なり。以下、

第六章に於て、新教傳道の澁滯並に其原因を論じ、所云る新神學の流行を以て、其一元因となせり。而して、自由派が、各教會内に同意者を多く得たる割りに、其自派內に加入者を得たると少なく、即はち味方を混同的に收入して、結合的に收攬すると能はず、精神に於て成功し、形跡に於て失敗したる所以を敍するの所ろ、尤とも明晣、尤とも公平なりと云ふべし。ユニテリアンたり、普及福音派たるもの、好面目ありと云ふべし。

第七章に於て、舊神學破壞せざる可らずと云ひ、第八、第九、第十の三章に於て、新神學の建設を論ずと云ふ所ろ、固より、識者に於て多く異論あるべき筈なしと云へども、抑そも此の神學を破壞して、彼の神學を建設すと云ふが如きは、元と是れ著者本領の希望たる可らず、當に、神學以外に宗教の要樞を置くと明言すべきにあらずや。

第十一章、基督の本意を論ずる所ろ、須からく、最とも莊嚴筆華最上に煥發すべし。而して、「基督は哲學者にあらず、政治家にあらず、社會改良家にあらず、又宗教上の立法者にもあらず、即はち宗教界のホーメルなり」と輕々評斷し去る所ろ、甚はだしき遺憾あり。但だ夫れ、

宗教家の如きも宜しく自己の區域を守りて其自から任ずべき者を以て自任し、その以外の事に至りては他の專門家に委ぬべきなり、哲學の事は宜しく哲學者に任して可なるべく、倫理の事は倫理學者に任して可なるべし、國家政治の事も亦然り、而して宗教は人間の至情を說き、人世の眞實を發揮し、神人和合の眞意を體實して、怨みず、咎めず、限なき喜望と勇氣とを以てこの生を送るの大精神を養ふべきもの也、吾人はその理想として基督を仰ぎ、又吾人の弱を助け、我力の甚だ足らざるを補ふべき大師友として基督を愛するの念、轉た切なるを覺ゆる也。

と云ふに至りて、痛快を覺ゆ。

第十二章以下三章は、基督教の傳道法を論ず。左の三節は、即はち、此論の醇精にして、且つ尤とも覽はしきもの也、

今後基督教を我國に傳道せんには、日本教會の獨立と神學思想の獨立とを全くするを以て其の方針と爲さゞる可らず。

吾人は神學上に於て必しも盡く自由說を取る者にあらず又傳道上に於ても盡く外國教師を排斥せんとする者にあらず此等の事に就きては宜しく寬容なるべし即はち神學說に關しては固より異論を許すべく、宣教師には固より其一臂を乞ふべし、然れども凡ての場合に我日本教會の獨立と自由とを束縛さるるなからんとに注意せざる可らず、新くせんには吾人の信ずる所にては、從來の組織慣行上に於て大に改革する所なかる可らず。

然らば日本の傳道の爲めに外國人の助を受くるは凡べて不義なるか、吾人は答へて日はん、之を受けんとする吾人の精神如何に由りては決して不義の事にあらず。

著者は、遂に論結して、各派の同志、堅固なる精神上の團結を組織し、先づ日本獨立の一教會を結構するを以て、將來の傳道策の第一要件となせり。

基督に關し、外國宣教師に關し、又、何故に基督教の傳道を必要とするやの所以などに關しては、固より異見ありと雖ども、吾人は、大躰に於て、此書の主旨に贊同す。而して、凡そ、現在の教勢に顧慮せる識者中、大率ね此に類似せる意見を抱かざるものは、蓋し多からじと信ず。

故に、論評の公平なる、現在せる新思想を略ぼ代言せる、所見の簡潔なる、文章の典雅なると等に於て、吾人は此書の優所を識認し、其公版せられたるを歡迎す。

日淸軍記　後編

戰記を發見する所ろ、各社各色あり。挿畫の風流にして、文章に趣味あるは、民友社の日淸軍記か。後編は、前編に比べて些さか粗漏の心地すれど、黄海の激戰を記すあたり、精緻十分なり。

大日本膨脹論

是れ皆な一と度び觸目したるもの、然れども、此册子に於て之と會すれば更に新鮮なる心地す。

年首の歌の聲

帝國未だ名に於て欽定歌宗あらずと雖ども、事實に於ては、之に比ふべきもの存す。年々詠進の御題の歌は、誰か之を撰ずる。而して、撰拔の榮を蒙ぶりたる歌の風は、果して能く國民當代の美趣にかなひ、其の詩想の求むる所ろに應ずるや否や。帝國正さに大に動き、人心甚はだしく昂揚す、詩情の動く所ろ、歌品の形はす所ろ、豈に依然として千古不易なるを得んや。文學もと閥弊すくなきとを得べし、たゞ暗に、欽定の威力を藉るとき、則はち人爲に束縛し、固息に歡絡して、陋者の死音をして朗々として謳はしむるとあり、國家の美神、御顏をそむけ玉はざらんや。昔しは、太宰純之に慨して曰く、古より總じて位高き人に物の上手はなき物にて、上手はいつも賤しき物に出來るなり、歌の道にても、人丸、赤人は貴人にあらず、古今集を撰びたる人にも、友則一人大内記にて、五位の宮人なり、貫之は又其下とみゆ、躬恒は甲斐の目、忠岑は右衞門の府生なれば、皆な地下の賤しき者どもなり、此輩皆な歌道に達せし故に撰集の勅を受けたり、歌の

盛んなりし時だに高位の人には達者稀なり、況んや今の世、歌道衰微の時に、公家の高位の人に何として上手あるべき、我に眼なき故に、公家の名家にて歌所と定められたる人を必らず上手ぞと思ひて、其の添削批判を受けなば、淺ましき事なり、然れども、名利は悲しき物にて、ほまれを得て世にほこらんと計る也と。古今同事あり、慨意彼是感通せずや。富士谷御杖亦曰く、上つ代には、歌の巧拙をいふ事、絶えて物にも見えぬことなり、されば所詮は、後の世の歌は、歌合のなごりなりとぞおぼゆると。判詞の所判、そも〳〵何ほどの價値ぞや。

雪嶺、佛徒に檄す

佛徒に檄す七篇、字々慷慨の涙ならぬはなし。或は聳動せしめ、或は痛歎せしめ、或は理解せしめ、或は反顧せしめ、或は激し、或は罵り、或は慰さめ、或は泣く。抑そも、何等、信切多情の文ぞや。而して、文中、左の一節を以て、理の骨子となし、倘且つ惣ての宗教家に警告するに足る、

目的を達するには方便なきを得ざるも、目的を達するに欠く可ざる方便は取も直さず目的の一部たるべければ、方便なりとて實に人に信ぜしめんと欲せば、自ら先づ實に之を信ぜざる可らざる也。堂宇に飾り付けたる偶像は單に愚夫愚婦を欺むくが爲なりとするは、如何にも心得がたき次第ならずや。宗教の幹用は心に在らん、然れば信ずること誠なれば感ずること深し、感じて手の舞ひ足の踏むを知らざるあり、感じて歌を詠じ、感じて樂を奏し、感じて畫を寫し、感じて像を刻み、感じて家を建る、亦自然なるのみ。宗教は心に在りとして之を外形に現はすこと莫れとは云ふべからず。觀得し來て慈悲の篤きに感じ、人にせば斯の若き面貌ならんとして、塑像を作り、觀得し來て勢力の大なるに感じ、人にせば斯の若き家屋に住するならんとして宮殿を作る、必らずしも不可とせざるべし。設し之を不可とせば、美の觀念は心に在りとして、之に供ふの藝術を痴呆視せざる可らず。

嗚呼、宗教の心を知る篤きと、如斯きは多からず。宗教の論なるもの、豈に牢獄的神學ならんや。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

西郷隆盛傳

第四巻に於て、戊辰破裂の前後、南洲先生が如何に卓抜せる、岩倉卿が如何に斷乎たる、土佐及び後藤伯が如何に依然として曖昧たりしかの事情を悉くし、伏見鳥羽開戰前后の曲折、機一髪の鼓動、歴々として指點の中にあり。又、勝波舟が、死地に處して晏如たる、傑人相察し心肝互ひに照らすの狀、明晰なる順序を經て一々指證あり。德川家處分に於ける、南洲の盡力、二傑高輪に於て相見ると同日、京都に於て五條の誓文の發せられたる關係等、今更の如く、愕かる。山岡鐵舟、彰義隊士に諭して効なく、五月十四日拂曉、路を轉じて家に歸り、茫然として空しく砲聲の轟々たるを聞くと云ふに至て、誰か同[illegible]の涙なからん。奥羽の征討に、大山綱良を參謀とし、彼が兵大抵鬪死して僅かに薩長の兵五十餘人を餘せしと云ふに至つて、其の甚苦を察すと云へども、別日の鹿島縣令、すでに此時に於て南洲の識拔に與かりたるとを知る。此の巻、左の一節を結句とす、

此時に當り隆盛の德望は實に天下を風靡し四海の等しく欽仰する所なりき、若し隆盛をして爭名競利の人物ならしめんには誰か亦之に敵するものあらんや、然れども隆盛の目的とする所は王政復古を成就して國家の統一を計り以て進んで對外の大策を講するにあり、彼の勢を貪り名を爭ふが如きは實に隆盛の精神にあらざりき。故に箱館の地平定するに及び再たび鹿兒島に歸りたり。

嗚呼これ尤好く南洲を知り、亦尤もよく南洲當時の志を表白したるもの也。此書の長所、即はち此邊の消息にあり。

第三巻以前の細評本誌第四百四號にあり、參看せよ。

新井白石

愛山氏の「新井白石」は、久しく待れたりき。既に出でゝ滿足せしめたり。

「余は白石を書くまじと思ひたり」と。而して倘は勉强卒業せり。評論自から緻密、加之、太はだ公平なり。

河村瑞軒に知らるの一章。作者、人を觀る同情の濃やかなるを見す。曰く、若し河村をして尋常富貴の翁たらしめば、彼が好意を謝絕するに於て何かあらんと。誘惑、迷悶の跡をうつす、掌紋に指ざすが如し。

曰く、彼が何人にも屈せず、何人をも畏れざる傲慢も此醇儒

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

の和氣には融けざるを得ざりき」と。一句、白石が冷たる胸壁を穿つ。

萩原重秀彈劾の一章まことに壓卷、白石の人物を畫く、之に過ぎたるもの多からじ。正直にして狹固なる、執着にして精忠なる、義とせられたる復讐心に勃々とし、天地開闢せしより此方未だ聞及ばずと迄に自信せる、眼光烱々の一役人が敵を睨むの爲體、活如として紙上に躍る。

太陽

「太陽」出でたり、未聞の大雜誌とす。體裁は「評論之評論」に據るものの如し。第一號所載の文中、紅葉の取舵(盲船頭)を第一とす、畫も亦た之に稱ふ。

帝國文學

井上哲次郎氏等が發起せる帝國文學會より發行する所なり。井上氏が日本文學論は氣燄千丈、非條約改正論に於て帝國民の爲めに悲音を灑されしとは雲泥万里の懸隔なり。

少年世界

漣山人の編輯となりたれば、前途望み多し、但だ文章は、今少しく練磨ありたしと思ふものも見ゆる也。

爛煥

『さびしい』とは何ぞや

布川無籟庵

われ人共に、或る境遇に接すれば、彼所はいと「さびしき」場所にぞある、今宵はいと「さびしき」夜にぞあるなど、知らず識らず言ひ出るとあり、特に女性はさびしがるの質ある如し、そも〳〵「さびしい」とは何ぞや、われ人共に何が故に「さびしき」を感ずるにや、如何の時と所とを「さびし」とは云ふ乎、想ひ來れば自明の理にしあれど、試に之を說かん。

●其定義　世に「さびしき」「さびれる」「さぶしい」等いふは四隣物靜かにして賑かならず、徒然のあまり心細く、何んとなく面白からず、樂しからざる時所を云ふ、之を漢字にて解すれば、寂は喧字の反對にて、物音なくひそとしたるより取用ひて靜の極を云ひ、寞は漠と同字、はてしもなき意にして、寥は虛濶の義、闃は寂字の義ありと云ふ(譯文筌蹄參考)又風の吹きすさみて凄しき折は瑟々と云ひ、雨には淋々と云ひ、古戰場、墓地等には荒涼と云ふが如き、其他蕭索、蕭條、冷落、凄愴等の文字も、前出せる定義中に包含せらるゝの形容詞なりとす。

●さびしきを感ずる理由　通常われ人が、さびしきを感ず

るは、物靜かに賑かならざる時所にあり、さるが故に春風駘蕩の季はさびしからずして、秋日落葉の季はさびし、諸人の雜騷せる市街は賑かにしてさびしからず、深山の奥の谷川の細き流れ微かの音だもなく、閑古鳥の彼方此方に飛び行く所やさびしきを感ず、家人爐邊に團欒して快談數刻、何人かさびしきを感ぜん、而かも獨り居やしかみ火鉢も夜半の伽、寥々として深更に入れば、人犬の聲だも耳朶に觸れず、何んとなくさびし、小雨そぼふり門訪ふ人も稀に、寂々たる暗の夜は、げに

一夜づゝ淋しさ替る時雨かな　乙由

の感なくむばあらず、されど見渡す限り、柳櫻をこきまぜたる春の錦の都に遊ばゞ、いかでかさびしきを感ぜんや。

さる故を以て、さびしきを感ずる所以は、言はでも明かならんが、われ思ふに、さびしきを感ずる理由は、平常われ人を繞圍する事物の同類が減少し去り、加之異類の事物（平常に感觸せざる）の少數に而かも心を樂ましむる事物の足らざる塲合に生ずるものなり、されば樂し賑しと云へば積極的にして、悲し淒しと云へば消極的となるなり、凡て平生感觸する事物の同類たると異類たるとを問はず、われ人の意氣に適し心を樂ましむる繞圍物の、積極的に多數なる時所は樂しく、之に反して消極的に少數なれば、さびしきを感ずるものと云ふべし故に寺院をさびしと云ふは、平生接觸せざる事物、而かも通常われ人の厭嫌する事物に接するか爲め也、雨夜のさびしきは、四隣の雜騷を減少するが爲め也、山奧のさびしきは人犬の聲音も絕えて寂々たるが爲め也、鳥獸すら友を求め群を樂む、況んや人生、樂しく睦ましき友なく、孤煢獨居のわれ人に適せざるは、自然の理りとや云はん。

◎此感情と兩性、年齡　女性は男性に比して、さびしきを感ずること深くして大なり、同年齡の男女兩性が、日常の擧動に徵して其例を見るに足る、婦人は小暗き所、森林鬱蒼たる所は更なり、少女に至ては夜半厠にだも、慈母に伴はれんことを望みがちのもの、われ屢々其例を見る。

何故に男性は、さびしさを感ずること少なき乎、其理由や數多ありと雖も、性質上の關係によるもの多きに居る、男性は女性に比して一層自由なることは、何人も認知するが如し、此自由の性や種々樣々の繞圍物に接せしめ、千變万化の境遇に遭はしむ、之を以て新奇異變の狀態を得ること屢々なり、此變態を得ること大なると共に心性の變換作用を敏銳ならしむるは自明の理なり、之よりして容易には驚き恐れ淒く等のこと少なく從て勇氣を增し、從て進取改革の性に富ましむ、既に變換作用敏にして勇氣を增し、進取冒險の氣象あるが故に、槪して男性はさびしきを感ずること少なきなり、されば古代より妖怪の退治、魔物の打擊譚は、悉く男子の行爲にあらざるもの稀なり。

何故に女性は、さびしさを感ずること多き乎、こは前述せる男性と相反するの性質に基くこと大なり、女性は槪して男性に比すれば勇氣に乏しく、保守的にして變態を得、異境に接すること稀なれば、新奇の事物は更なり、多少所謂陰氣なる所、小

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

暗き所を厭ひ、時には僅かの異變に驚き恐れて、慄然たることあり、蓋し婦人は概して男子に比すれば、抽象的一統理法を辨知すること遲く、智識低度にあるものなれば、之を社會發達史に徵すれば、恰も拜物敎的時代に屬するもの多きが如し、彼の幽靈妖怪等の誤想は、科學的智識の發達せず、自然を崇拜するより來りし者なり、抽象的に自然を觀察する時代に達せざる時は、自然に服從し之が威力を恐れ、之を崇拜す從て自然界の美を認め、之を快感すること能はず、而して婦人の無敎育者は恰も此時代を反復するものといふべし。

之を年齡に於て見るに、幼少の時は男女兩性共に之を感ずること大なり、壯年の男子にして「さびしき夜」なり、「さびしき」所なりと、かこち顔にて厭ひ嫌ふものは稀に見る所、而して女性は男性に比すれば、稍長く感ずる者なり、其故は前述する如く性質上より影響せらるゝ所ならずむばあらず、幼少の男女が特にさびしきを感ずるは、社會發達の最初に於て、拜物敎的思想あるが如く、自然に對しては萬事新奇に感ぜらるる折にしあれば、何事も賑かに樂しさうに、雜騷する所を好み只管に五官を絕ゑず刺激して、多數の新奇なる事物に接觸せんことを望むものなるが故に、小兒を眠らせんとする時は、寂しき所に連れ行くは、日常母親の爲す所なり、小兒を眠らせんが爲めには、家人も小聲に談話し、若しくは離れ座敷に導くことを爲すなり、而して小兒は飽迄も遊戯に耽り、賑かに騷しき場所に常住せんことを望むこと極めて强き折柄、忽ち寂寞たる室內、物靜かなる所に接遇すれば、直ちに從來の賑かさを想出して、彼所に遊戯し彼所に樂まんとす、斯に於て乎、寂しき所を嫌厭するなり、小兒は人生の苦樂、人生の行路難の奈何を辨知する者にあらず、常住遊戯し逸樂するの境遇のみと思ふが故に、寂しき所は彼の厭倦する者となる、斯の如くして寂しき所と時とを厭嫌するの情や、漸々身心の成長するに從ひ、種々の變態を得、遂にさびしきを感ずること稀有となる。さるに老人となりては、所謂年老小兒となりて、寂しきを感ずること深くなるは、蓋し老後餘生の少なきを以て、過去の經驗せる過失、若しくは功名などのみ意識の舞臺に跋扈し來りて將來前程萬里の希望空しくなりたるによらずむばあらず、之を以て老人の病床には、數多の人の訪問と、人生の歷史談最も樂しみを與ふ。

斯かる理由より壯年の人は、幼少の者と老人とを慰樂せしむるの切要を感せざるべからず、是れ敢て統計學上より論するを俟たずして、心理學上より明かならん、犯罪の進化史に徵すれば、或る蠻人の部落に到れば四十歲以上の男女は、悉く殺戮せられ、あるは放棄せられて其影だも見ざる者ありしと云ふ、又事實の有無は暫らく置き、我國の口碑にも老人を捨てたるの談あり、姨捨山の名の殘るこそ、いたはしき限なれ。

◉さびしき情を惹起する事物　四隣の寂寞として聲なきも寥々として萬籟寂たるも、平常接觸する事物の減少するも、淋々として降る雨も、悉々として吹く風も、山寺の晩鐘も、皆な之れさびしきを感ぜしむ、今爰に其他の要素を略述せん。

第一、拜物的觀念、（生物の死、幽靈、祖先崇拜等）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第二、怪談、(昔時に在りしとの談、自ら誤れる經驗談)
第三、怪物の畫圖、(妖怪の繪畫、怪物談を記したる書物)

是等の三者や、今日と雖も尙ほわれ人の目にし耳にする所、而してさびしきを感せしむるの要素となるものなり、第一は社會發達上、一般の曾て經過し來れる自然崇拜時代の遺形にして、視覺より入りて印象となりたる觀念なり、第二は聽覺より入りて印象となりたる觀念なり、第三は視覺より來りしもの、而してさびしきを感せしむるものは、視、聽の二官重もにして觸覺、嗅覺は殆んと加入せざるが如し、但し心理的解説に從へば、視覺も觸覺より大に補助せらるゝと雖も、爰には稍複雜に發達したる場合を云ふ。

爰に注意すべきは、淋し恐ろし、驚く慄く等は竝もに視、聽の二官に基くと是なり、見よ彼の自然の盲者は、視覺を欠くが故に場所に於ける寂しさを感するこ殆んとなく、設假之れありとするも極めて鈍し、彼れ物靜かなる場所の果して如何なるものなるかを辨せず、唯物靜かなるを知る、未だ四隣の荒涼たる光景の何んとなく寂しさを感せしむるを知らざるなり。

又啞者は音響を感するとなきが故に、聽覺より入るものを欠く、盲者と均しくさびしきを感すると少なし、一は四邊の光景を見る能はざるより、他は四邊の音響を聞き能はざるより共に、さびしきを感するの要素を形造らず、果して然らば感官の完備せるものにあらずんば、眞の寂しさを感じ得ざるものなるを知るべし。

◉さびしさの美　悲哀にも美あり、驚愕にも美あり、さびしさにも亦、美なくんばあらず、美は心に快感を與ふるもの、さびしきとは、何れの所にか快感を與ふるものぞ。

(一)　さびしさの美は靜にあり　靜は動の反、動あれば爰に靜あり靜なくして動あらじ、人は動を好むと共に靜を愛するは天性なり、天地自然の美もわれ人が、汲々齷齪として「動」にある時に感すると少なく「靜」にある時に感ずるものなり、卓越なる詩人は市人雜騷する大俗中にある能く「靜」を覺るなり。

　さみだれやある夜ひそかにまつの月　蓼太
　ひとつ葉や一葉〳〵の今朝の霜　支考
　聲かれて猿の齒白し峯の月　其角

の感は「靜」に居らざれば味ふべからず。

(二)　さびしさの美は幽にあり　玄妙の理想、無限悠久の觀念は幽邃なる所に養はる、喧々擾々、俗氣紛々たる所、多くは大才を出さず、心幽邃の境に走り、魂玄妙の境に達して、始めて高尙なる詩人たるを得ん、而して幽玄はさびしき時所に感ずべきのみ。

　木がらしの地にも落さぬ時雨かな　許六
　啄木鳥の枯木さがすや花の中　丈草
　名月やうまれかはらば峯の松　蓼太

の感は「幽」に居らずむば、味ふべからず。

(三)　さびしきの美は陰にあり　天地萬物は、必ずしも陰陽の説を以て解すべからず、而かも陽は賑かに又花やかなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

始めて詩人たるを得べし、さる故を以て天地の美を歌ひ、人生の苦樂を詠まんものは、必ずや人情の極致を穿つの能力なかるべからず、從て悲しみ樂しみ、さびしみうれし等を悟るを要するなり、芭蕉、西行、兼好が閑寂、幽邃の句あるは、彼等が能く、さびしさの美を認めたるによらずむばあらず。之を以てさびしき時と所との眞味を悟り、此間に無限悠久の妙えなる美を認むるは、當に詩人の力むべきもの、彼の幼兒の如く拜物教的印象より、之を恐れ之を忌むは拙なき業のみ、婦人は更らなり、われ人共に彼の詩人の如くさびしき時所にありて、美を認むるの能力を養はざるべからず、芭蕉いへらく、

俳諧といふに三の品あり、寂寞はその情をいへり、女色美肴にあそびて、飽食のさびをたのしみ、風流はそのすがたをいへり、綾羅錦繡に居て、薦着たる人をわすれず、風雅は其言語をいへり、言語は虛に居て、實をおこなふべし、實に居て虛にあそぶ事はかたしと、

芭蕉やげに、寂しさを觀たるもの、柳居が、

　淋しさの極意はねむし閑古鳥

と詠せしは、之れ敍事のみ、さびしさの美はねむき所に存する者にあらず、之に反して千代が、

　蜻蛉つり今日は何處まで行つたやら
　起てみつ寐て見つ蚊帳のひろさかな

に至つては、實に無限無量のさびしさを表はし、非尋常の悲哀を混入したるものと云ふべし、若し夫れ詩人たるもの幽玄、

とせば、陰は沈づみて閑なる所、女性の陰、月の陰、大凡陰氣なるものは、陽氣に對して存するもの、而して俗氣を去り、清涼を呼び、閑寂を知らんものは、陽に行かずして陰に赴かざるを得ず。

　冬籠り夜晝竹の嵐かな　杉風
　行燈を月の夜にせん郭公　嵐雪
　猫の戀止とき閨のおぼろ月　芭蕉

の感は「陰」に居らずむば、味ふべからず。

(四)　さびしさの美は漠にあり　四隣漠々として耳目に觸るゝ事物の少なき所は、さびしきものなり、然れども漠々たさる所は心を廣濶ならしめ、氣を慰め鬱を散らすの快あり、日常齷齪として俗務に汲々し、心神鬱して厭倦を催ふすの時、騷がしき市街を離れ、白馬に鞭つて漠々として、ひろ〳〵としてはてしもなき野外に至らば、其快言ふべからず、黄昏の枯野、廣漠たる野原のさびしさの美は其漠たる所にあり、澎湃たる大洋の寞としたる所、亦之れ一の美ならずや。

◉さびしさを感ずる情と詩人　小兒のさびしと云ふは、本能的に屬し、壯年男子の之を感せざるは、勇氣剛强の情に壓せらるゝに依り、老人の之を感ずるは、餘生僅かにして希望の前程に横はらざるに基く、女性の之を感ずると多きは、性質上の關係によるとは、前述したるが如し。

されど詩人たらんものは、壯老の時代を問はず、常にさびしさを感ずべく、又感ずるを要するもの也、凡そ詩人は多感多情のもの、此の多感多情の性あり、詞藻洵爛たるものありて

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

寂靜、閑寂、幽邃等の美を描出したりとせば、是れさびしさの眞味を解したるものなりと云ふべし。

●社會の進步とさびしき時所位の變更　　社會益々進步し、人口愈々增殖するに從ひ、人類は飽迄も自然界を利用せんとして止まざるなり、さる故に宮城野には大根を植え、草より出てゝ草に入る武藏野の月、今や大都會の雜然たる屋上に眺められ、山間幽谷にも入足到らざるなく、陸奥の端までも滊笛の響く世となり、千島の山も琉球の川も、いづれ人聲を聞かざるなく、北氷洋の探撿すらさかりつらんには、さびしき時所位は、社會の進步と共に變更すると勢ひなり、

されど、社會の進步はさびしき時所位を變更するに止まり、全く消滅し盡すものにはあらず、見よ寺院の貧弱なるものは下宿屋の如く、墓地は柳櫻をこきまぜて、御茶屋の軒を列ぬるとも、將又、澤山の奥の其奥までも、滊笛の響くとするも武藏野の如く那須野原が變はるとするも、さびしき時所の變更を促すのみにして消滅とは云ひ難し、

拜物的觀念は減少すとも、親子の情けのあらん限り、田舍に滊笛響き渡るとも、人民に貧富の隔てあらん限り、墓地は俗氣に滿さるゝとも、人心に死の苦あらん限り、喬木天を衝くの高きに達するとも、其蔭のあらん限り、改進を喜び希望を持するとも、古物を崇び保守的觀念のあらん限り、さびしき時所のなからでやは。かの、

さびしさに宿を立ち出で眺れば
何處も同じ秋の夕暮

山里は冬ぞさびしさまさりけり
人目も草も枯れぬと思へば

斯の如き感は、容易すく消滅せざるべし、若し夫れ人口の增殖は廣漠たる野原をして、大都會とならしめ、山里の冬の空にも、製造場の黒煙はみなぎるとも、此人口多數、此家屋の稠密、此自然界の利用と共に、之に伴ふ人間貧富の懸隔、強弱の差異、犯罪者、孤兒、貧弱者の增加なくむばあらず、之れあらん限り、秋の夕暮や山里の冬のさびしさ、減少するも、衣食住に對し、人生社會に對するものゝ、さびしさは寧ろ增加するならん、一瓢の酒に醉ひ、花に戯れ柳にうかれ、所謂天地を樂むの境界にあらんものも、遂には社會的境遇より、さびしさを感するに至るや必せり。

噫、此傾向歴々として存するを見る、一片のパンを得んが爲め苦める狀を歌ふの詩人あり、大厦高樓の其脇に三四日の斷食せる老父を痛み憤慨に堪えずと爲すものあり、弱きを助け強きを挫かんとする義俠者あり、かの社會主義は容易すく贊成すべからざるもの、かの虚無黨はげに恐るべきもの、而かも其精粹を詩的に觀せよ、寧ろ人生憐れむべきものにあらずや、然り而して、さびしさは此般の中に存在するを認めざるべからず、社會的境遇のさびしさは、增進し天然的境遇のさびしさは、夫れ減少するものならんか、大詩人たるものは、此般の消息を辨じて、此增進の傾向あるさびしさを歌ひ、以て富强者の心を刺激し、貧弱者の心を和らげ、漸々知らず識らず此詩人の大精神に感化せられ、萬人共に洋々として相和樂する境界に達するに至らしむべし。大凡詩人たらんもの、時と所との如何を問はず、さびしさの美を看取すると、詩人其自身の目的として必要なるのみならず、人生社會の爲め夥からざる利を與ふるものと信ずるなり、（乙未一月十日稿）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とこしへの春

志ぐれ女

心なき
秋の　あらしの　つれなくも
　春たつ　はじめの　その日より
あきの終の　この日まで
　百の千鳥や　花鳥（はなどり）や
はかなき蝶を　迷はせし
　梢の　花や　野の　末の
あだなる　花の　おもかげを
　いづれの　里へか　吹はらはれ
かへらぬ　昔を　しのぶなる
　あはれげに　立つ　山も野も
自然の　色は　かはりけり

夕の　あらし　おさまりて
　小春の　今朝の　のどけさに
うかれ　まひ行く　蝶ひとつ
　のこされて
かなしげに　なく　虫の音も
　つゆに　なやめる　白菊も
なれの　宿には　あらぬかし
　春みし　花の　面影を
忘れでやある　汝（なれ）　蝶よ
　うつろひ　やすき　そが中に
きえざる　影を　やどせしや
　問へど　答へで　ひらひらと
まふて　ゆくゑは　いづこぞや
　我をも　具（ぐ）せよ　もろともに
くちせぬ　夢の　花の　都に。

〰〰〰〰〰〰〰〰

須磨の浦に昔を懐ふ

花影子

（一）蟲のなく音を友として、
　　君がすさびし笛のねの、
調（しらべ）をこよひ小夜嵐、
　　松のこずゑにくり返し、
君をてらせし月かげも、
　　昔のまゝの光なり。

（二）その月影をくだきつゝ、
　　ひきてはよする波の音、
笛のしらべに合せつゝ、
　　いかなる節を謳ひしか、
明日の哀はしらずして、
　　名殘の曲となりにけり。

（三）歸れば岸にくだくると、
　　知りつかへりし白波の、
心ぞいとも床しかる。
　　詩神はなみの聲かりて、
今宵もこゝに佇める、
　　われに昔をかたるなり。

（四）君が最期（いまは）のさまを見し、
　　淡路島山小夜ぎりに、
顔をかくしてさす汐の、
　　音に哀れはいやまさり、
流り火細くまたゝきて、
　　いつしか月もおちに幾。

〰〰〰〰〰〰〰〰

をみなへし

同

一〇野わきの風の　ふくときに、
　なびきやすきは　萩すゝき、
あゝ女郎花　なれはしも、
　さほどならぬに　人はなぞ
きくさへいとも　忌はしき、
　うかれ女なぞに　たとふらん。

二〇 あゝをみなへし　なが顔に、
　靈のなみだの　あふるゝは、
うきなをたてし　世の人の、
　心なきをば　うらむらん。
塵のあとなき　ながこゝろ、
　しらぬこゝろや　なげくらん。

三、自然のうみし　をとめらに、
　けがれしものは　なきなるに、
母のこゝろを　しらぬ世は、
　けがれをしらぬ　處女らの、
名をさへけがす　うたてさよ、
　かれらのなくも　ことはりよ。

なき友を思ひて　同

一 遠島やまに　日はいりて、
　帆かげのこらず　なりにけり。
風もいつしか　たえにしに、
　ひとりきこゆる　波のをと。

二 きしうつ波の　音きけば、
　いまゝたすぎし　秋の日に、
　ともにきゝにし　かの友の、
　　思をかたる　こゝちなり。

三 人も草木も　みないれて、
　星のみさむる　小夜中に、
波のひゞきの　なつかしく、
　ひとりたゞづむ　わが身かな。

三五の月

好木時文

何心なく只だ見れば、青海原に横ふる、玦へ渡りたる一輪の、浮世を照す有明月、世に不可思議な水晶宮。春の夕は梅ヶ枝を、華麗に移して麗しく。夏の涼は江水に、浮べる舟の美しく、水面に寫して遠近と、大宮人の友となり。
秋は紅葉の紅へに、錦を飾る諸草や、木々に水玉の麗はしく。
冬は雪見に興を添ふ。
凡そ四季の觀樂に、汝の待らぬ時かある、浮世に在るも、世捨人も、善美の心なきはなし、汝の美妙に感ずなる。
去れば、今も古も、文人の、文に歌に詩に載せて、喜怒哀樂の七情を、聊つも世情の道理なれ。
なよ月よ、汝は古も、今も尙ほ、變らざらめ、數千年の先きの月、今日浮世に照る月も、なぞか變りし事在るか、去るを、時の古今とて、其の境遇の異なるとて、心に浮ぶ感念の、千萬人の個々なるは、思ふも凡智の狹心さ。
眞如の月は、何日とて、千萬年に變らじを、已が浮世の俗情に、千々に砕くる物思ひ、汝と共に死するもあり、汝と共に樂むあり、汝と共に笑ふあり、汝と共に悲むあり、俗に趁るゝ衆生の、汝の爲めに、美の爲めに、犠牲となるぞ、うたてけれ。
吁々、月よ、有情、無情、草の菴に音傳れよ、共に語らん世の事を。
賤の伏屋に入りし時、汝の心は如何ありし。
玉樓瓊殿に照りし時、汝の心は如何なりし。
樵夫の薪を負ふて、家路に歸る夕ま暮、山路導く時はなぞ。
海士の小舟に苫照す、汝の心は如何なりし。
旅裡に入りし君の影、珠盃に入りし君の影。
破窗に入りし春の影、草頭に宿る春の影。
身一つにて、廣き世に、貧富貴賤を音傳れし。
君の心ぞ、聞かまほし、君の心ぞ聞かまほし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

祈の雫

白衣

遠き處にのみ愛の濺ぎ塲を索めて、身の邊にある荒畑を耕し養はんことを思はず、却て遁れ厭ひて、眉を顰め頭を揮ることを爲し。大げさなる言葉を放ちて、五尺に過ぎぬ身を忘れ、天を指して父と呼び、地をもて承足と爲せども、足下にある石塊に蹶きて仆るゝを知らず。學問てふ雨を五寸に足らぬ腦天に降らして、理想てふ虹を薄暗き鼠色の空に懸け、偏へに五色の眩ゆき彩色に迷ふて、消え去れる後に今更の樣に驚く哉。世間てふ捨言葉に人間交互の大恩を忘れて、おぼつかなき大路を歩み、小さき心に片輪なる天地を畫き出して、幽靈のやうなる幻像を攫まんとて失望し、天國といふものを此世の外に求めて我身を忘れんとするなり。

神よ。萬の物の中に住み給ふ神よ。其大御心を賤しき僕に示し給へ。我が狹まき心を開き給へ。爾の御顏を掩へて、白雲のあなたに遠く、我等を迷はし給ふこと勿れ。放れ馬の如き我心に、神の法律の轡を銜め、神の正義の手綱を着け、爾の一人子なるキリストに導かるゝを得せしめ給へ。謙遜にしていと小さきものとならしめ給へ。人の師表たらんなどの空しき高慢を抱かしめ給はざれ。

土ともなり、塵ともなりて我等を敎へ給ふ神は讃むべき哉。

我等をして土の如く低からしめ、塵の如く卑からしめ給へ。我若し櫻の花の如く美しくあらんに、降る雨に伴はれて泥の中に交ることを喜ばしめ給へ。我若し鶯の如き清き聲を有たんに、籠の中に捕はれて人に慰を與ふるを我務となさしめ給へ。月は光を惜まず、賤が伏屋の雨漏る軒の隙よりも心よく音づれて、貧き人の燈となるなり。蓮は其身を汚れたる泥水に委ねて、其薰ばしき香を朝の風に送り、凉しき色を露の白玉に輝かすなり。神の御心、何處にかそれ顯はれざらん。世界は我の有ならんや。土の穴にうごめく虫も盡く神の有なり。我は世界と同じく神の子なり、同じく同胞に非ざらんや。されば我、いかで自から高ふすることを得べけんや。

神、肉體となりて我等に宿り給へり、ダビデの裔は大工にてありしなり。賤しき女の胎に宿り給へり。我等の救主の一人の卑き木工なりしことは、我等の救に非ずや。我等をして高臺の上に立つ學者とならしめ給ふ勿れ。賤しきものの友とならしめ給へ。馬槽の中にこそは我等の主は在はすらめ。温き臥床の中に熟睡して夢の幻に心を惑はし、旭日の高く昇りしに起き出でゝ、勵み勉むる人々の嘲とならしめ給はざれ。キリストが收税者の友となり、娼婦の慰め人となり給ひしことを忘れしめ給はざれ。姦婬の婦の石にて打殺すべかりしならば、キリストは何故に之を許し給ひつるぞや。我等をして姦婬の眞の意を知らしめ給へ、清潔の眞の意を知らしめ給へ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

意味なき形體儀式に迷ふと勿からしめ給へ。眞心の底に住ましめ給へ。

何とて世は騷ぎ、人は叫ぶや、正義といふ聲は大風の如く吹くものならんや。愛といふ泉は大河となりて流るゝものならんや。地下に包まれて巖の陰に湧き出で、綠の草に深く蔽はるゝの處には、眞の救の泉の湧き出づることを思はしめよ。俵數を數へて其富に誇ることあらざれ。爾の食ふ處幾許なりや。我等をして一粒の種となるを得せしめ給へ。土に埋め、腐れしめ、御心に協はゞ、其中より芽を出させ給へ、人の糧となることを得せしめ給へ。

葡萄の酒はキリストの御血なり。パンの一切はキリストの御身なり。人に飲ましめ、人に食はしむ。忌はしき十字架上の釘の銹、滴たる生血の穢れには、古往今來、十萬億の世界の罪を購ひて限り知られず。淸きもの淸からんや。高きもの高からんや。我等人の足を濯ふを得ば福なる哉、人の僕となるを得ば福なる哉、我身の卑き、猶人の爲めに盡すを得ば誠に福なる哉。我等をして、十字架と高く叫ぶを禁めしめ給へ。愛の贖と說き廻ると勿からしめ給へ。我等に生命を與へ給へ。罪人に涙を濺ぎ、哀しむ人と共に哀ましめよ。

己が弱き心の道に步まで、義の堅き巖の上に立たしめよ。愛の泉は、義の巖の際より外は湧き出でざることを忘れしめ給はざれ。名劍の鋭き貌、電光を閃かす其中には、大空の遠き心を込めて、滿らん計りの露を宿し、霜冴ゆる燒刄の面には、春の霞の鈍の棚引くことを思はしめ給へ。武士の義膽鐵魂こそ、一片の落花を憐れむ眞の情なることを味はしめよ。

我等若し、我卑しき此身、穢れし此世にだに住むとを得ずば如何で高き淸き天を仰ぐを得んや。梢に降り積む雪にだに撓み折るゝものならば、我早や死なん、香ばしき花の匂ひに、何時か人を慰め得んや。腕は強かれ、足は勞れざれ、凍えざれ、餓えざれ、我煩惱の大河を渡て彼岸に達するを得ば、感謝すべき哉。然らざれば如何にしてか人に同情の涙を濺かん、如何で世の人の友たらん。我れ穢れし土に我根を徹き、塵に充てる大氣に住み、頑に屹立てる幹を身體とし、哀れげなる苔をもて我衣となすを得ば、類ひなき花の我梢に咲く日のあらんかし、其時我を喜ばしむる美しき鳥も我枝を宿とせん、人は我一枝を持歸りて、憂を拂ふの玉箒ともせん。

山水の景色のいかに幽に、いかに淸くあらんも、山は是れ土巖の塊、鬼薊も生茂るなる、川の底には磊々たる小石、垢に包まされて汚穢のもの充てり、されど山水の風趣は此中に在るを見よ。玲瓏なる明鏡に玉兎の臟るゝと見し月は、唯是燒土の姿なるかも、燒土を措きて他に、さて明月なるものを索めんや。人世の煩雜無味、厭はしく憂はしきと何ぞ限らん、其處にやどる風趣、含める光明は深き哉、貴き哉。人間といふを止めしめよ、天國といふを止めしめよ。我をしてソロモ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ソの栄華を思はざらしめ給へ、野の百合花を慕はしめ給へ。白銀の柱梁、黄金の欄干、紫に灼く王座には没藥乳香の薫物を香らせて、世のものならぬ高くめでたき宮殿を打立て、蜂蜜の言葉のいかに甘く、鴿の眼のいかに柔さしく、錦の旗を東風に翻へして人を呼び集め。四季の花を一時に咲かして人を仰がしむるとも、夫れ將た何の効あるべき、弱き兎の臥床となり、賤が乙女の小さき手に折られ、棘の中に身を寄する百合の花のいかに美はしきかを見よ。爾は葡萄を植ゑにき、汝は棚を造りにき、肥料を施しにき、時を俟ちにき、花は咲きぬ、實は結びぬ、結びし實は野葡萄にてありき、食ふ可らざるものにてありしなり、總は毀たれて狐と狸に委せられなん。天國を叫ぶの人は哀れなる哉。

萬軍の主なる神よ。我心を弱くして、世に恐れて、臆挫くることを勿からしめ給へ。平和安心をもて、逃遁の口實となさしめ給ふと勿れ。主よ、主よの呼聲をもて、世の責任、身の義務を忘るゝの空言となさしめ給ふと勿れ。弱き心に涙あらんや、涙なくして同情あらんや、愛あらんや。願はくは、退けらるゝパリサイ人とならずして、召さるゝ漁夫とならん。物言ふ臆病者とならずして、愛に住む勇者とならん。我が足を地に着けて、正しく立つを得せしめよ。アヽ、十字架上の血の滴りを下し、我をして飲むことを得せしめ給へ。

片々

○文部大臣西園寺侯の女學論

◎侯が答に曰く、女子教育の如きも一時大に西洋風の教育を奬勵したるも、其結果は善良ならず、今日は稍や舊時に復し女子をば男子の爲に便利なる樣に教育せんとする思想一般なるが如し、是れ恐らくは一時躁急の舉動に出で弊害も少からざりしより是に至れるならん、余が西洋に在りし時傳聞する所によれば、當時東京なる日本の學校の如きは男生徒と女生徒と共に酒宴を催して交際を爲さしめたる所もありしとの事あり、是蓋し傳聞の誤に出でたる者にして事實にはあらざるべし、然れども以て一時の躁動の常道によらざりしを察すべき也、此の如きは急進の弊と云ふべし、されども此弊を恐れて、女子教育の方針を全く封建時代の有樣に引戻さんとするは、望むべきことにあらず、日本の現在の有樣にては、女子は未だ十分の地位に達したる者とは思はれず、廣く世界の有樣を見るに、開化の程度高き國ほど、女子の地位も亦高きとは疑ふ可らざる所なり、故に余は適當の方便により漸次に女子の教育をも進歩せしめ、以て次第に女子の地位を高くせんことを望む、但し急激の方法により數年前に實驗したる如き失敗を再演せんとは、吳々も愼まざる可らず。

◎又曰く、訓令六號の第三(小學生徒は活潑なる運動に便する爲め不得已場合の外學校内に於ては洋服又は和服を問はず、凡て筒袖を用ゐしむべし)に示せし筒袖のことは、主として男兒の衣服につきて述べたるが如く見へ、且つ其前項には、特別に男子のことを掲げある故、女子は右の筒袖云々の範圍内にあらずと言ふものあり、余は此訓令の起案の際には、未だ文部の局にあらざりしと雖ども、後より之を聞正すに、當時の評議にては、女子を其中に包括する精神なりし由なり、然れども、必ずしも場合の如何を問はず、女子をして筒袖を着せしむる精神にあらず、成べくならば筒袖を着けて活潑に運動せしむべしとの主意なり、又余が一箇の考を言へば、近頃の女學校生徒の如く、大なる帶を脊負はしめ、帶の邊には猶更に厚く綿を入れたる衣服を着けしめ、如何にも重々しく繼ひたる者を見るに、

多くは身動き自由ならず、不活潑なること實に甚し、身体の發達期に際する女兒を斯る風俗の壓制の下に縛りつけることは、實に恐るべき弊害なれば、小學校に在る女生徒の如きは、分けて此惡風より救ひ出し、身体の發達を全くせしめたく思ふなり、如何なる事情をも顧りみず、必らず筒袖にすべしと云ふにはあらざれども、少くも年稚なる女兒丈には、務めて輕便の衣服を着けしむることを望まざるを得ず、故に余も亦成べくは、女兒にも筒袖を用ひしめんことを欲す。

（教育時論第三百五十號）

○淸國皇太后

今は昔し支那廣東の邊りに貧しき家あり、父母と一女一男、將に餓んとして、此女を或將軍の奴隷に賣りしが、測らざりき、此の一女子は、皇帝に徵されて、今や支那國皇帝の母后たる人ぞ即はち此人ならんとは。

○大隈伯北堂

前日逝去ありし大隈伯の北堂は善行多かりし人なり。わけて記憶すべきは、華奢輕薄を嫌ひ、人に物を贈るなど皆な至誠眞情を旨とし、木のはしを新世帶の人に贈り、裏の大根を鍋島家に呈するなど、感泣すべき赤心の人なりけり。

○横井つせ子君を惜む

小楠先生の室、横井つせ子の君、去年十二月十九日攝州神戸に於て永眠せらる、其姪、德富健二郎君、追弔痛惜の情を文にせらる。赤誠流露、讀者を泣かしむ。つせ子君は、堅貞至實の人なりき。聞く、小楠先生常に歎じて曰く、おつせは君子だと。

健二郞君が弔詞の結末に云ふ、吁吾叔母君横井つせ子は、外に赫々の名なく、昭々の功なきが如しと雖とも、内に無價の寶玉を藏し玉へり、其己を忘れて人の爲にし、天を信じて命に安んじ玉へる献身の生涯は、實に掬むで盡きざる教訓の泉なりと。

記者竊しみて弔詞を讃し、同もに其永逝を惜む。

○公務に對する婦女子の活動

は、近頃に至りて特に活潑なることを覺ゆ。倫敦にては、帝國音樂館（Empire Music hall）と稱する實際忌まはしき社交を爲す不潔の倶樂部に對する倫敦郡會の激戰に於て、郡會の正義派を代表せるはサルミストン、チャント夫人なるが、音樂館派は、年に利益配當七割を受る株主をはじめ、有力の新聞二社を后ろ楯として未曾有の競爭を爲せしに拘はらず、夫人は遂に三十二に對する七十五の多數にて大勝利を得、郡會議員となりたり。又、スコットランドにては、醫學教育に於て女子も男子同樣の特許學位等を得んとする運動多年の事にて、即はちドクトル、ピッキス、ブレーキ女史其他は、もとエヂンバラ大學にて醫學を學びしに中途謝絕せられしかば、爾來二十年斷えず運動せし甲斐ありて、近頃女史と其友人等は皆な男子同樣の特許を得るに至りたり。今后、蘇國に於ては、女子は男子同樣の醫學教育をうけ、又學位を受ることを得べし◎ニウ、サウス、ヱールスにては、兩派政黨の首領、ヘンリ、パークスも、ヂチヂ、ヂツブスも、同もに女子撰擧權に贊成する旨公言したり◎ニウヂランドにては、女子にあらゆる投票權を附與することなりたれども、たゞ植民地政廳の部だけは之れを許可せず、そは此所に於ては政廳役員の位全く婦女子にのみ落つべしと思はるるほどの權力あるを以て也。

◎女子高等師範學校に　撰科を置かるゝことゝなりぬ。出願期限は三月廿日。人數は五名の制限なり。

◎田村鴫村東京を去る　青山英和女學校に教授し、米國より歸來只管ら女子敎育に熱心なりし田村武次君は、不得已家累あり暫らく敎育界を離れ西京の實業界に入る。近日一詩を寄せて、

水明山紫自無塵、　花月只憐落魄人、數□僑居誰謂小、坐收三十六峯春。

◎佐々城豐壽女史歸京　北海に愛兒を伴なひて親から開拓の業に手を下しつゝありし同女史は、良人本支君南洋行の故によりて此頃歸京し當分在留せらる。

◎熊本縣の女子教育界　他府縣に在ては女教員養成の不得策を論ずる折柄、由來保守僻ありし熊本縣に於ては、反て之を必要なりと認め、第三回乙種講習課には生徒の全數四十名を悉く女子より取ると云ふ。

◎印度の婚風大家如斯　かのダイヤー氏が主筆たるボムベー、ガーデアンと、救世軍の器關たるウチア、クライとは、近頃ろ「人力車」を輸入せんとする計畫ありとて大に慨歎し、聞くならく此車引くものは三年にして死せんとて、太はだ矯正の運動に熱心せり。

◎孤女學院特別資本金　の募集前號に在るを見て、四谷鮫ヶ橋貧民學校教師生徒はクリスマスの募金を一切有益の事に義捨せんとて、即はち二圓〇四錢五厘五毛を此の資本金に對して献じたり。之れ最初非常の醵募者として長く紀念せらるなるべし。

廣告

○レヂー、コングルトンの聞書

譯寫

レヂー、コングルトンは日本の女學雜誌に於て其友人ミス、マクレーンの最も潔白無私なる所業に就き却て反對なる誤謬の報告ありしを聽き甚た心を勞せり、ミス、マクレーンは其一身を日本の爲に獻けたる最も親切の友人として十有餘年の間ロンドンに來る處の日本人を導き助け又日本に於ても同樣の働を爲せることは皆人の知る處なり、レヂー、コングルトン幷に他の多くの英國の友人等は其全き信用をミス、マクレーンに措き且つ同女に對せる園照夫人の訴訟は理由なきことして却下せられたることを證明す、此訴訟の裁判は一八九三年八月卅一日ロンドンに於て極て丁寧に開庭せられミス、マクレーンは一々明瞭に答辨せられて其無實の申出を表證せり、然るに園照夫人は今日に至り再ひ其無實の事を言ひふらすとは誠に正しからさる所業なり、レヂー、コングルトンは斯かる所業を不憫に思ひ且つ苟も眞理と正義とを重んする人は日本に於ても亦英國に於ても斯の如き根據なき誹謗に向ひ些少の注意も惹き起さゞることを信す、

一八九四年九月廿日　佛國ドロームの旅中にて手記

連署

レヂー、アウグスタ、インスタイン

レヂー、キアリク、ブキアナン

ミッセス、エミリー、サラ、バルスフォールド

各手記

第六版

百人一首講義

正價二十八錢

郵稅四錢

正月の遊びカルタに及かず、カルタの歌の講義此書を以て第一とすとて愛讀せらる。第六版を重ぬるは之が爲めなり。

自宅獨習

◎新刊修學法(御購讀を祈る)

普通學全科講義

●定價一冊十二錢(郵稅二錢)割引の法あり●詳細の規則御入用の方は郵券二錢●見本及規則共なれば郵券十四錢を添へ御申込を乞ふ

本誌は從來既存せる杜撰粗陋の者にあらず親切周到通俗簡明なり老若何人も讀んで益あり

講師及學科

◎動物學、獨國理學博士丘淺次郎君◎植物學、英國林娜學士會員伊藤篤太郎君◎理物理學、理學士市岡太次郎君◎天文學及三角術、理學士鹽野敬三郎君◎化學、理學士吉岡哲太郎君◎地質學、及地文學理學士山上萬次郎君◎萬國地理及日本地理、松島剛君◎日本歷史、久米邦武君◎支那歷史、中西牛郎君◎萬國歷史、農學士米國文學士內村鑑三君◎算數學、代數學及幾何學、理學士文學士狩野亨吉君◎生理學、醫學士高田耕安君◎心理學、文學士松本亦太郎君◎論理學、文學士大西祝君◎倫理學、文學士大島義脩君◎教育學、文學士草塲率彥君◎經濟學、法學士藤井宇平君◎社會學、文學士渡邊又次郎君◎法學、法學士三宅長策君◎政治學、文學士高田早苗君◎農學、農學士米國理學士荒川重秀君◎商業學、高等商業學校教授飯田旗郎君◎國語學、第一高等學校講師文學士芳賀矢一君、文學士草野清民君◎日本文學史、文學士菊地壽人君◎支那學、文學士宮本正貫君◎英語學、米國文學士岸本能武太君◎當學、佐々木三六君◎科外講義、文學博士井上哲次郎君◎文學博士元良勇次郎君◎哲學博士中島力造君

◎◎第一號は一月十日既に發行せり◎◎

東京市牛込區新小川町三丁目八番地

管理　從五位犬飼嚴鷹

幹事　前川太郎

有文館

文學界

第二十四號

十二月卅日

業平朝臣　天知

草庵漫唫　一酒竹

大つごもり　一葉

眞美人　孤蝶

みをつくし　殘花

アンゼロ　藤村

時文

廿七年を送る　風

當年文壇。安田作兵衛。珍談倶樂部　潭

東京市神田南神保町十五番地

文學界雜誌社

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

基督教新誌第七號

毎月一冊發兌 定價五錢

社說
明治廿八年を迎ふ　泉　哉

講壇
眞正の幸福　川井運吉

論說
道
女性同情の淚　破蕉

寄書
煙草屋に頼まれたる吉郎君　碎軟生
まことさ生に答ふ　小蛇生
來信　松永弘齊
呈バックストン閣下書　靑柳猛

雜錄
獻けし我　愛櫻生
朝詣　山田糸子
名譽の記念　小里女史
加藤勝君遺稿
自殺者墓頭之感慨　蕭條居寓客

小兒欄
福壽草　有美堂

觀察
●ムーディー來る●パラドックス●濫用濫川●濃き酒●渡り傳道師●福音を恥る者●牧者も牧者なり

發行所　文學界書店

世光第一號

毎月一冊發兌 定價五錢

社說
「世光」
大日本の使命
教會一致論

論說
思想界の概況と吾人の覺悟　西岡正親
ヒューマニチーの人ヴヰクトル、ユーゴー　德山有隣
ばんやんの溢恩を讀みて所感を記す　島崎生
新聞紙的國民　無名氏

雜錄
十字架のかげ
昔の跡
ほとゝぎす
飛鳥山
基督降誕日

家庭
孝心ある小供の話

發行所　文學界書店

宇宙神教第五號

毎月一冊發兌 一冊五錢

社說
新歲を迎ふ
雜說
復興

寄書
國民的勢力としての基督教　渡瀨常吉
倫理研究に關する紛議　東塞
漫言一則　鴨村賤雄

雜錄
讀書法。水兵。ツウヰングリー傳　赤司繁太郎
片々

教の栞
新生　赤司繁太郎
基督教講義
說教者自身

新刊雜誌

發行所　東京麴町區飯田町四丁目五番地　宇宙神教發行所

眞理發行所移轉

○從來東京世光社に於て發行せし自由基督教派普及福音教會機關雜誌「眞理」は自今大阪市西區江戸堀北通二丁目百六十一番屋敷講道書院に於て發行し昔日の編輯人丸山通一再び犬馬の勞を盡し聊紙上舊知巳多年の恩顧に酬んとす我國に於て「歴史的研究」を唱道せし學術雜誌中の率先者たる「眞理」は宗教學哲學の問題を歴史的批評的に論究するに最公平誠實敏捷なる者なり○本月三十日發行の第六十二號には「保羅と耶蘇」(ムンチンゲル)、「希臘哲學の宇宙論」(クリストリーブ)、「基督論」(丸山通一)、「如何なる形にて開明國民に福音を弘すべきや」(博士リプジウス)、「朝鮮の宗教ー藤田捨松)、「異傳福音書」(藤田捨松)、其外雜錄批評等精萃を網羅す又同號より掲載する哲學史は本年中にカント前の哲學を說き終らんとす○第五十八號の「佛滅年考」(丸山通一)は「佛教史林」之を評して「滔々として數萬言、亦是一篇の大文字なり佛教家たる者見ざるべからず」と言ひ第五十九號の「漢字の沿革に據りて以て支那古代の開化の程度を論斷す」及第六十號の「戰爭は社會の秩序を保つ一要素なり」一は共に博士クリストリーブの稿にして一は斬新の說、一は適切の論、いづれも必讀の好文字なり又た第六十一號の「西藏所傳耶蘇一代記」(クリストリーブ)は嘗て「日本」に載せたる「耶蘇是佛徒」の原文を譯出し其僞書たる所以を論證して著者の奸策を抉き「獨英慈善事業二斑」(丸山通一)「占領地處分に付き」(MS生)の二篇亦讀者の一顧を價すべし○一冊七錢半年前金四十錢、一年前金七十五錢、廣告料一行七錢、批評を求て有益なる書を寄贈する時は廣告掲載の需に應ずることあるべし

發行所　大阪市西區江戸堀北通武丁目百六十一番屋敷　講道書院
賣捌所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　世光社

護教

吾人ハ神ヲ信ジ、神ニシテ人ナル基督ヲ信シ、人ノ中ニ行ル、聖靈ノ活動ヲ信ジ、人ノ品位ト權利トヲ信シ、贖罪ヲ信シ、永生ヲ信シ、教會ノ感化ヲ信ズ、吾人ノ期スル所ハ此信仰ヲ日本人民ノ中ニ植ヘントスルニ在リ、過去モ此目的ヲ以テ進ミ來レリ、未來モ亦此目的に因ツテ立タントス、

今ヤ我精神界ヲ顧ミルニ異論百出、人皆岐路ニ迷フ是豈吾人ガ筆ヲ載ニシテ、起ツベキノ時ニ非ズヤ、此目的ヲ達セシガ爲メニ、吾人ガ現ニ爲シツヽアル所左ノ如シ、

精神界目前ノ狀況ヲ詳序シ、其ノ大勢ヲ推論スルヿ(之レガ爲メニ日誌、神儒佛、通信、批評ノ欄ヲ設ク)、

精神界ニ於ケル吾人ノ立場ヲ明ニシ、吾人ノ信ズル基督教理ヲ主張シ、辨證スルヿ(之レガ爲メニ靜思、社說ノ欄ヲ設ク)、

讀者ノ爲メニ基督教的智識ヲ供シ、併セテ家庭ノ敬虔ヲ助クルヿ(之レガ爲メニ雜記史論、家庭ノ欄ヲ設ク)、

若シ夫レ議論文章、敢テ人後ヲ逐ハス、自然ニ自ラ一種ノ特色ヲ有スル世既ニ公論アリ、吾人必シモ自ラ喋々スルヲ要セザルナリ、

左ノ四名ハ本紙ノ編輯ニ從事ス

山路彌吉　竹越與三郎
水上梅彦　工藤陽太郎(客員)

一部二錢五厘、三ヶ月郵稅共三十五錢、半ヶ年六十六錢、一ヶ年全一圓三十錢、

發行所　東京麻布霞町十八番地　護教社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

若松賤子譯

クリスマス
感謝の美談 **祝ひうた** 新刊書

光、家の内に滿ちて、天使、幼な兒に生れ、麗質かゞやき、誠心きらめき、惰け万物に徹す、美くしきと、愛らしきと、氣高きと、尊さきと、言はんかたなし。父母は爲めに淸きを增し、家は爲めに睦みを增し、近隣の貧者、太陽を望むが如し。十二月廿五日、高貴聖美、絕頂に達して、ほめ歌朗らかに、讃美洋々たる時、一生の極美をしめす。此の可憐にして、尊さむ可き一小女が言行こそ、クリスマスを祝ふ第一の敎訓なれ。而して、父母の愛、同胞の睦み、貧者が生涯、或ひは感奮すべく、或ひは泣くべく、或ひは抱腹絕倒すべき人事悉さくあり、眞さに、一編の最好小說さや言はん。若松賤子、材を西國の名著に取りて、事を本邦の今日にあはせ、言文同致の平易なる文章にうつす。大人もさより讀むべし、小兒尙ほ玩はふべし。

去る十日發賣、一册定價十錢、郵稅二錢

出版所　警醒社書店
取次所　女學雜誌社
關西賣捌　大坂　福音社
賣捌　仙臺　大塚書店

右批評の一

（早稻田文學第七十九號）

若松賤子女史譯、警醒社發兌、カロル（歌子）さいふ慈悲の念ふかき富家の一少女が基督降誕祭の祝日に裏の路遂に住せるラグルスさいふ貧家の子を悉く招きて饗應し且種々のクリスマスの贈物を惠みてよろこばすさいふ單純なる趣向の一小話にして譯文あどけなく出來て面白し小供の讀物さして適當のものなり原文を見ざれば深くは巧拙を評しがたけれど原文の精神を失はざらんの苦心見えたり文躰は言文一致躰今一息にして、國語さいふを得べし中にも面白きはカロルよりの招待を受けてラグルス夫人が遂にその子等に禮儀作法を教へ、大騷ぎして用意に取りかゝる條なり貧家のおかみさんの語氣口吻さながらに躍如たり。

俳諧史傳 全

和裝美本定價三十錢郵稅四錢

◉小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』製本既成す、背て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

◉思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美、妙悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

◉俳諧は和歌に孕まれ、連歌に與り、松永貞德さなりて、諧謔を擅にし、西山宗因さなりて奇巧好笑なる增林の花を吹かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕なつて、正風俳諧さなり、平民的叙情の歌の面目を構成す。

◉其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を叙し、其特相を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然さして讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

◉これを分てば俳人個々の傳記さなり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を橫溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽邃なる秘奧に冥合せしむるに足らむ。

◉若しそれ、一字句もせず、一筆輕々に下さず、言々讃あり句々據るさころあり、而も文章、平易簡明、叙記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむさするの士、一本を座右に備へば、得るさころ豈に鮮少ならむや。

發行所　女學雜誌社
下六番町六番地

透谷集

菊版美本肖像入凡二百七十頁
十月七日發賣定價三十八錢

右は故北村透谷子が遺稿斷篇の散逸せんとを惜みて一册子となしたるものなり。子が藝術窮愁の短き生涯に於て筆にしたるものは悉く網羅蒐集したれば、氏が平生の素志を惜む人はこの小集を愛讃せらるゝに吝ならざるべし。この册子厭世詩家さ女性の一文に始まりて蝶の歌に畢る。心機妙變の論あり、油地獄の評あり、歌念佛の評あり、三日の幻境あり、情熱の辭あり、哀詞の序あり、其他國民の思想を論じ、富嶽の詩神を想ひ、情死をあはれみ、ゆきだをれを悲しみ、螢を歌ふ、其他深情の文字少なからず。

發行所　文學界書店
神田南神保町十四番地

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（明治廿五年三月十五日遞信省許可）

女學雜誌社出版書籍

書名	著者	定價	郵税
（再版）小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵税四錢
（六版）百人一首講義	鈴木弘恭氏講	同廿八錢	同四錢
（信孝神父）腓立比物語	櫻井成明氏譯	同廿五錢	同四錢
（齧さき）猫と鼠	女學雜誌社編	同五錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治著	一冊十錢	郵税二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可減	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同四錢
產婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵税
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同十錢	同
兒育草	同	同八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

書名	著者	定價	郵税
戲曲 桂五郎	阿波鳴門左衛門著	十錢	郵税二錢
高橋傳五郎	巖本善治編輯	五錢	郵税二錢
偉人物	山月子稿	同	同前

發行所 女學雜誌

東京麴町區一番町十八番地に事務所を置く

大日本海外教育會

六合雜誌

第百六十九號 一月十五日發兌

本誌は本號より其面目を一新し從來の論說批評の外に時論雜錄等の欄を設け一層廣く宗教道德哲學文學及社會問題に關する精嚴有益なる論文を集め內外思想の潮流を明にし兼て之に處するの道を講せんとす而て編輯は自今文學士大西祝原田助文學士松本亦太郎（マスター、オブ、アート）岸本能武太浮田和民（ドクトル、オフ、フイロソヒイ）小野英次郎の六氏專ら其任に當り益々材料を精撰し報道を廣くし以て時勢の要求に負かざらんことを力むべし猶改良の詳細の如きは本號に就きて見よ本紙改良の趣意●改造的事業、大西祝●宗教の基礎、岸本能武太●教勢不振の原因、浮田和民●羅馬法皇と社會問題、小野英二郎⊙批評●横井時雄氏の新著を評す、桝野悅興⊙時論●懷疑を破す●宗教界に於ける保守思想の根據●進步的佛教徒の立脚地⊙雜錄⊙レッシングの指環の說話と鳩翁道話の明德の玉の譬喩●印度近世宗教改革者（其二）●故教授ロメーンズ氏○○○定價一冊前金八錢、半ケ年六冊同金四十三錢（凡て郵稅不要）

發行所 東京京橋區出雲町一番地 六合雜誌社

女學雜誌定價表

前金	壹冊 金拾錢 一年前金 金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同三回以上一割引 同六回以上二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年一月廿四日印刷
明治廿八年一月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工塲（電話十九番）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省許可)

女學雜誌社出版書籍

(再版)小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵稅四錢
(六版)百人一首講義	鈴木弘恭氏講	同廿八錢	同四錢
(信神孝父)腓立比物語	櫻井成明氏譯	同廿五錢	同四錢
(話さき)猫と鼠	女學雜誌社編	同五錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治著	一冊十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可滅	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同四錢
產婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文小學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎・布川孫市兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎・植木枝盛兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	十錢	同
兒育草	同	八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

職曲 桂五郎	阿波鳴門左衛門著	十錢	郵稅二錢
高橋傳五郎	巖本善治編輯	五錢	郵稅二錢
偉人物	山月子稿	同前	

發行所 女學雜誌

東京麹町區一番町十八番地に事務所を置く

大日本海外教育會

六合雜誌

第百六十九號 一月十五日發兌

本誌は本號より其面目を一新し從來の論說批評の外に時論雜錄等の欄を設け一層廣く宗教道德哲學文學及社會問題に關する精嚴有益なる論文を集め內外思想の潮流を明にし兼て之に處するの道を講ぜんとす而して編輯は自今文學士大西祝原田助文學士松本亦太郎マスター、オブ、アート岸本能武太浮田和民ドクトル、オブ、フィロソヒイ小野英次郎の六氏專ら其任に當り益々材料を精撰し報道を廣くし以て時勢の要求に負かざらんことを力むべし猶改良の詳細の如きは本號に就きて見よ本紙改良の趣意●改造的事業、大西祝●宗教の基礎、岸本能武太●教勢不振の原因、浮田和民●羅馬法皇と社會問題、小野英二郎◉批評●横井時雄氏の新著を評す、狩野悅興◉時論●懷疑を破す●宗教界に於ける保守思想の根據●進步的佛教徒の立脚地◉雜錄◉レッシングの指環の說話と鳩翁道話の明德の王の譬喩●印度近世宗教改革者(其二)●故教授ロメーンズ氏○○○

定價一冊前金八錢、半ヶ年六冊同金四十三錢(凡て郵稅不要)

發行所 東京京橋區出雲町一番地 六合雜誌社

女學雜誌定價表

前金	壹冊價 金拾錢 一年前金 金壹圓 (無郵稅)
廣告料	一行一回(廿七字詰)前金十錢 同三回以上一割引 同六回以上二割引 ○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年一月廿四日印刷
明治廿八年一月廿五日發行

東京市麹町區下六番町六番地
發行兼編輯者 巖本善治
東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
印刷者 根岸高光
東京市麹町區下六番町六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場(電話十九番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY